

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.16

2013.1

目次

学院史資料室写真集14「大学講堂兼礼拝堂」	1
A・A・ベンネット先生の働き	2
関東学院大学のデジタル・アーカイヴへの取り組み	4
関東学院の源流を探る 渡部一高	6
大学講堂兼礼拝堂の鐘	13
六浦校地（金沢八景キャンパス）の取得について	14
学院史資料展2011・2012 ～建学の精神と校訓「人になれ 奉仕せよ」の教育～	16
「山麓通信」と「SCM」の経緯	20
『山麓通信』の紹介	21
『山麓通信』総目次	22
坂田祐先生と大賀一郎先生	27
「大賀ハス」を追跡して	28
編集後記	28



学院史資料室写真集14・正門から見た大学講堂兼礼拝堂・さんようホール
六浦校地（金沢八景キャンパス）正門（侍従川）側から見た大学講堂兼礼拝堂・さんようホールおよびその北側部分拡大写真（大学校章と鐘）（P.13記事参照）

One of Mr. Albert Arnold Bennett's Activities

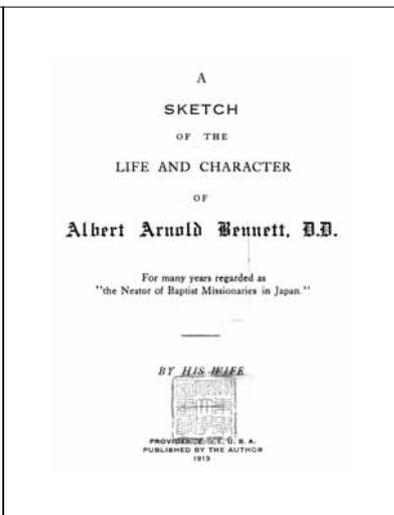
STORY OF THE TIDAL WAVE.

The same year, in June, came the terrible Tidal Wave. This was one of the most appalling disasters that ever befell Japan. In a single hour over eight hundred houses were demolished, more than twenty thousand people killed, and about three thousand wounded. A striking evidence of the esteem and confidence in which Mr. Bennett was held by the foreign residents of Yokohama was their choice of him as one of a committee of three to visit the region devastated and distribute their charity. (The other two members of the committee were also missionaries—Rev. J. G. Cleveland, Ph. D., and Rev. W. S. Worden, M. D.) The three started, but two of them were unable to remain long enough to complete the survey of the territory, so it devolved on Mr. Bennett to do this alone, and learn the real extent of the need. The funds entrusted to him amounted to several thousand dollars. In his memorandum he writes—“The articles to be purchased were decided by the Committee as a whole. These were hemp, [condensed] milk, futon [bedding], boats. It fell to me attend to their distribution.” The bedding was “to be given to old men and women left without supporters.” “The milk was declared a great boon in the hospitals.” “All seemed grateful for the kindness of Yokohama people.” “The bulk of the funds has been expended in boats.” “The greatest loss was sustained by fishermen, not by farmers.” “Until boats are supplied, most able-bodied survivors are unable to support themselves. A sad tale was told me . . . of fishermen going to the shore and watching

abundance of fish only to turn back again in despair.” (The hemp was for making nets.)

“Rejoiced to hear that the Sekko Maru was going at last. Started. Went to sleep to awake an hour and a half later and find we had returned to this miserable O——on account of mist and wind. It is hard to be imprisoned here, but God knows what is best. Spent much of the morning talking with Y——about maps and also about religion.” The next day he writes: —“Still a prisoner, but trustful in the wisdom of the heavenly Father. Did considerable revising Analysis of Romans.” Next day,—“Another well-nigh sleepless night, tormented with flees and mosquitoes, but this morning got on the Sekko Maru and, with joy in my heart and thanksgiving to God, reached Shiogama.” Of the next night, spent in Mr. Hamblen's home in Sendai he writes, “delightful bed — no flees or mosquitoes.” He rendered exact account of all the money with receipts from those who had been helped by it. *The Japan Mail* added this note:—“Mr. Bennett has earned the gratitude not of afflicted people of northeastern Japan only, but also of the foreign residents of Tokyo and Yokohama whose charitable contributions he has so carefully distributed.— Ed. *J. M.*”

For these services, and as representative of the foreign community, he received from the Imperial Government a gold cup which he afterwards presented to his Alma Mater.



“He Lived to Serve”と校訓「人になれ 奉仕せよ」
1896 (明治29)年6月15日、東北地方の三陸海岸を襲った恐ろしい津波がありました。27,122人が亡くなり、約3,000人が負傷しました。史上最大の被害でした。A. A. ベンネット先生は、多くの寄付金を集めて、被災者の救済に力を尽くしました。60歳で天に召されるそのときまで、病院や刑務所などにも伝道のために足を運びました。
1884 (明治17)年10月6日に横浜バプテスト神学校は、横浜山手に創設された。同校の初代校長ベンネット先生は、1909 (明治42)年10月11日に挙行された同神学校創立25年記念会で祝禱され、その翌日に天に召されました。横浜外国人墓地にあるベンネット先生の墓碑には、“He Lived to Serve”と刻まれています。まさしく「彼は奉仕するために生まれました」。関東学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」の精神と同じキリスト教の精神を端的に表わしている生涯を、ベンネット先生は歩まれました。このようにキリスト教の精神に徹した偉大な聖徒を関東学院の建学者にもつことの仕合わせを感謝いたします。
(学院史資料室 瀬沼達也)

◀ A SKETCH OF THE LIFE AND CHARACTER OF ALBERT ARNOLD BENNETT, D. D. by his wife, [Mela Isabel (Barrows) Bennett] published by the author 1913

A・A・ベンネット先生の働き

—三陸沿岸大津波—

同じ年（1896年）6月、三陸沿岸¹⁾に恐ろしい津波がありました。これはかつて日本を襲った最も凄まじい災害の一つであります。僅か1時間の間に8百戸の家屋が崩壊し2万人以上の方が死亡、約3千人が負傷しました。その時、横浜居留の外国人がこの東北の被災地を訪問して、彼らの集めた救援物資を配布する役目の委員3名を選びましたが、そのひとりとしてベンネットが選ばれました。このことは、彼が如何に居留外国人の間で尊敬され、また信頼されているかを示す顕著な証しであります。（他の2人の委員は Rev. J. G. Cleveland, Ph. D.と Rev. W. S. Worden, M. D. の両宣教師。）

この3人は一緒に被災地を訪問しましたが、2人は被害調査の終るまで現地に滞在することができませんでしたので、残る仕事は全部ベンネットの肩にかかることとなり、調べてみると、実際に救援を必要とする範囲は予想以上に広大であることを知りました。彼に委託された救援金は数千ドルに上りました。彼の備忘録には「配給物資の購入は全体として委員会によって決められた。麻、コンデンス・ミルク、布団、漁船等、配布の仕事は自分に任せられた。」と記してあります。寝具類は「世話する者のいない男女老齢者に配ること」「ミルクは病院で大助かりと言われている」「人びとはみんな横浜人の親切を有難く思っているように見える」「資金の大部分は漁船に費やされた」「最大の被害は漁師にあり、農民には余りない」「漁船が補給されない限り、能力のある生存者でも自立することは不可能である」「漁師たちは浜に出て魚の大群を見つけても、どうすることもできず絶望して帰ってくるばかりという悲しい話をきいた」。（麻は漁網に使われます。）

「遂にセッコウ丸が出港と聞いて喜ぶ。出発。1時間半ばかり眠って、眼がさめてみると濃霧と風のために、この眼もあてられないO（大船渡港か）に追い戻されていた。此処に閉じ込められているのは辛いことであるけれど、最善の道を知り給うのは神様だけ。翌朝の大部分はYと2人で地図を見たり、宗教について語ったりして過ごした。」

翌日書いた手紙には「まだ囚われの身である。しかし天父の御意にお任せしている。『ロマ書解説』の改訂が相当進んだ。」とあります。次の日は「またも蚤と蚊に攻められてほとんど眠られなかった。しかし今朝はセッコウ丸に乗り込み、心は歓びにあふれ神に感謝の念を抱いて塩釜港に着いた。」その晩、仙台のハンブレン氏宅に泊っていて書いた手紙には「嬉しい快適なベッド——蚤も蚊も一疋もない。」とありました。

彼は委託された基金の正確な出納簿を被救援者の受取証を添えて委員会に提出しました。当時の *Japan Mail* 紙には次のような記事がありました。「ベンネット氏はひとり東北地方の被災者ばかりでなく、東京及び横浜在留の外国人からも彼らの送った慈善的援助物資をまことに行届いた配慮を以て配布してくれたことに対し大いに感謝された。—編集長 J. M.」この災害に際してベンネットの献身的奉仕に対し、また外国人居留地の救援者代表として、日本帝国政府から金杯一個を授与されました。

後にその金杯は彼の母校ブラウン大学に寄贈されました。

注1) 三陸沿岸：昔の陸奥、陸中、陸前の三国を三陸と言い現在の青森、岩手、宮城の海岸。1896年、1933年、1960年としばしば津波があったけれど、この1896年（明治29年）の被害が最も甚大であった。

<p>素 描</p> <p>（神学博士）</p> <p>アルバート アーノルド ベンネット</p> <p>その生涯と人物</p> <p>長年の間「日本におけるバプテスト宣教師の Nestor（賢明な老練者）として尊敬された。</p> <p>彼の妻編著</p> <p>（ロードアイランド州プロビデンス）</p> <p>1913</p>	<p>In Yokohama, Japan, in one of the most cosmopolitan cemeteries of the world there lies a large granite slab, upon four round boulders. On it a raised scroll bears the inscription—</p> <p>IN MEMORY OF</p> <p>ALBERT ARNOLD BENNETT</p> <p>AMERICAN BAPTIST MISSIONARY</p> <p>Born in Philadelphia, April 16, 1849</p> <p>Died in Yokohama, October 12, 1909</p> <p>永 眠 せ ば 幸 也</p> <p>That last line was felt by everyone to be the best summary possible in few words of his rare and beautiful life.</p>
--	---

〔追記〕

本文文末に「後にその金杯は彼の母校ブラウン大学に寄贈～」と記されていたので、2012年8月16日と9月20日に瀬沼から米国の Brown University に同金杯と関係資料の電子データでの提供をEメールで依頼した。同年9月25日、同大学 Archives の担当者から、残念ながら、見出せなかったが、今後も継続して探す旨の返事をEメールでいただいた。が、現時点では見つかったのご報告は受けていない。（学院史資料室 瀬沼達也）

◀メラ（・I）・パローズ・ベンネット編著、多田貞三訳『素描（神学博士）アルバート・アーノルド・ベンネットその生涯と人物——関東学院大学建学の小説——』関東学院大学1985年発行

関東学院大学のデジタル・アーカイブへの取り組み

図書館運営課資料係長 小山 信 弥

本学図書館本館には、本学が歩んできた道に関する資料が少なからず所蔵されている。多くは未整理の状態に置かれ現在まで当館の貴重書庫に眠っていた。現在の貴重書庫には完全ではないが空調設備が入り、温度・湿度とも一定の環境を保っている。本学の設立から現在に至るまで、膨大な数の資料が日々、生産され本学の意思決定過程や様々なイベントの記録など本学に関わる資料が、そのエビデンスとして残されているのである。大学図書館が所蔵する資料はその一部でしかない。太平洋戦争や、学生紛争とともに失われたものも数多いであろう。また、作成時には“重要な記録”という認識がされず、廃棄されたものも幾つかはあるであろう。教育機関というある意味では公共性が著しく高い機関においては、公文書のみならず私文書であっても精査して保存し、未来の経営やステークホルダーへのエビデンスとして活かすため、今後ますます保存・保管・活用が重要になってくる。誤解を恐れずに言えば、自らの機関の歴史を蔑ろにする機関に未来はないとも言えるのではないだろうか。

図書館の所蔵資料のデジタル・アーカイブ化への取り組みは、3年前からスタートをしている。現在の貴重書庫に移るまでの間に資料の劣化は目に見えない形で進行をしていると考えたからだ。(旧貴重書庫は、湿度管理のみが行われ、温度管理はできていなかった。)実際に資料群の中には、書かれたインクがかすれ、判読が困難になりつつある資料群も存在し急激な温度変化により、紙の酸化速度が早まっていた可能性も否定出来ない。デジタルアーカイブを行う際にも当然のことながら、予算が必要である。1年目は、デジタルアーカイブを手がける業者数社から提案という形でヒアリングを行い、見積もりを取って予算を要求し幸いにも予算を確保することができた。提案をしてい

ただいた数社から丸善・DNPを選定し実際に、アーカイブを行っている。今年度はA. A. Bennett著 *Self-Support* の原稿を選定しアーカイブを行った。(図1・2) 原稿はReport of the Conference of the Missionaries of the American Baptist Missionary Union in Japan (1909) [アメリカバプテスト協会のカンファレンスレポート (1909)] に掲載されたが掲載時には紙幅の都合からか、カットされている部分がある。手書きの原稿であるのでBennett氏の筆跡を現在に残す貴重な資料でもある。

この原稿が当館に所蔵されることになった経緯は、現在は不明である。所蔵に至る経緯も調査する必要があるだろう。学院関係資料はまだ多く所蔵をしているが、いまだ整理ができずにいるものも多数ある。学院関係部署と連携して整理を進め、内外の研究者の利用に供するため、また学院の歴史を語る文書類を長く保存していくためにも、アーカイブ化を進めていく必要があるだろう。また学院全体として、現用の文書を含めた保存体制と保存方法などのポリシーを設けていく必要もあるだろう。なぜならば、現用の文書は未来の歴史文書でもあるからだ。

現在の文書はボーンデジタルであるが、デジタルが故の弱点もある。保存メディアが新しくなれば再生は難しくなる。あれだけ事務所にあふれていたフロッピーディスクを、いまや見ることはほとんどなくなった。文書類は紙での保存が一番といわれるゆえんでもあろう。しかし記録し保存しておくものは文書だけとは限らない。音声であったり動画であったりした場合、事態はもっと深刻だ。学院各校が違ったポリシーで保存を行うのではなく学院全体でどう取り組んでいくかを議論する時期に来ているのではないかと思う。

Summary of Dr. A. A. Bennett's Article on *Self-Support*

Rev. A. A. Bennett is in charge of reports about the progress of discussions regarding "Self-Support" or becoming independent of the ABMU. The current situation in 1908 is that each year, more and more money is being requested of the American Board to support salaries of pastors and evangelists, and churches. He says that the problem involves differences in the point-of-view by Japanese and missionaries. A Japanese Reference Committee (sodaniinkai) was elected to review specific cases of salaries and bills of evangelists. But, it could not successfully conclude the issues because there is a misunderstanding regarding how much power and authority belongs to them and how much belongs to the missionary Reference Committee (senkyoshiinkai).

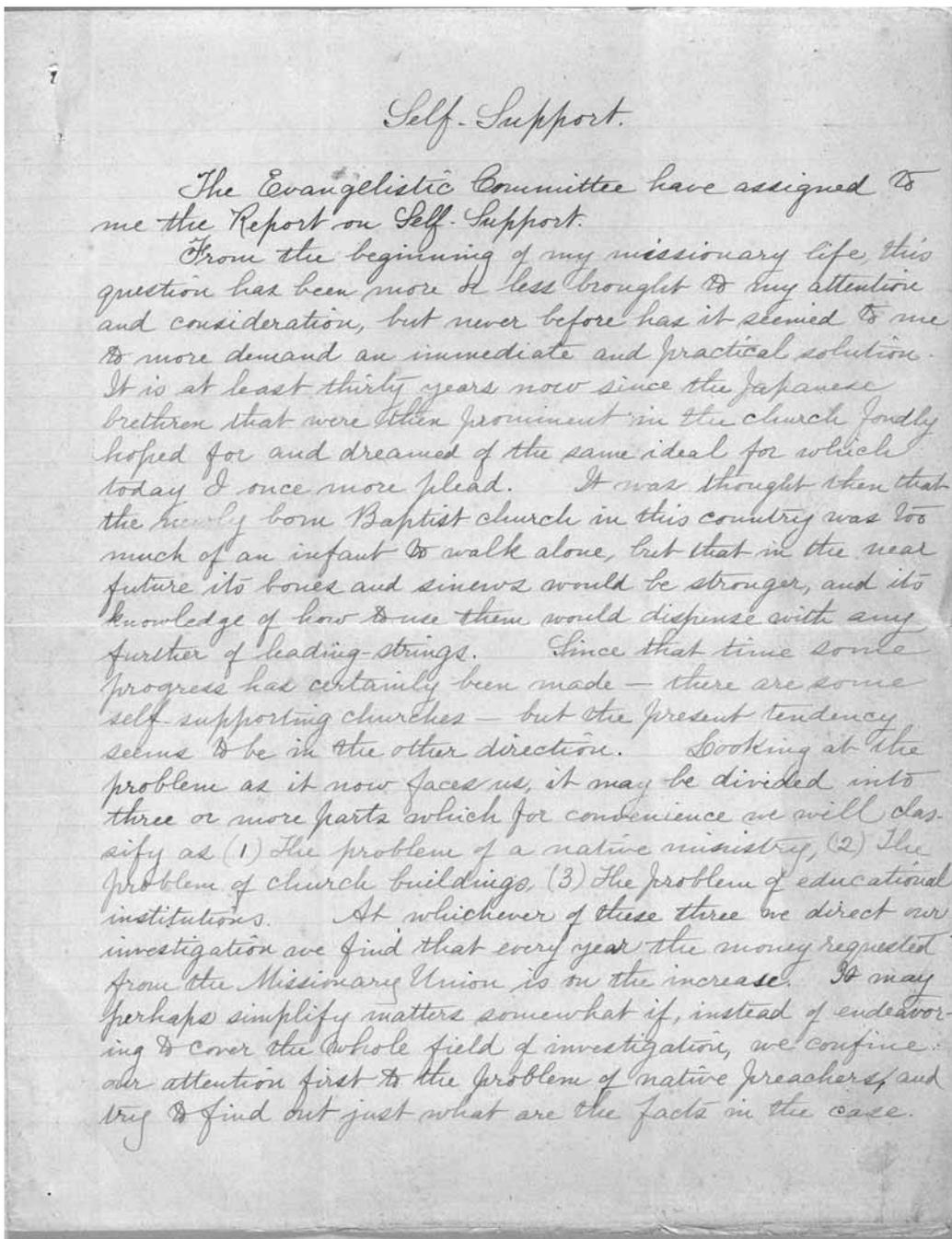
(Summarized by Roberta Stephens, American Baptist Missionary)

「自給独立」に関する Dr. A. A. ベンネット直筆報告書の要約

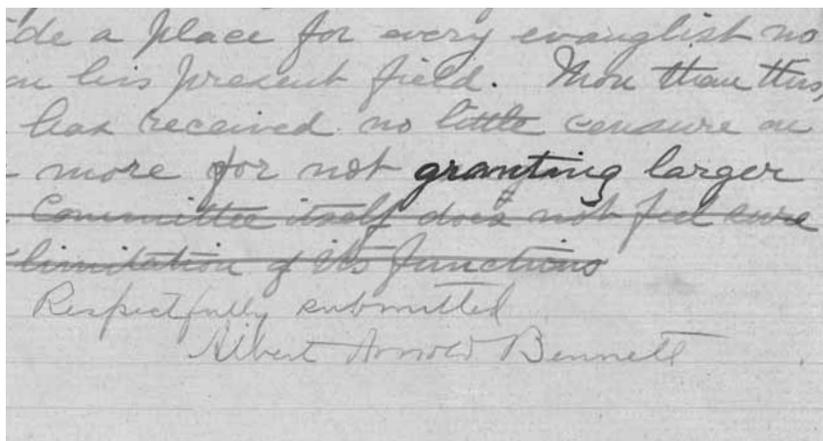
A. A. ベンネット宣教師は、日本の教会の自給独立に関する審議過程について、あるいはアメリカ・バプテスト・ミッション・ユニオン (ABMU) からの独立について報告する責任を持っていた。1908年当時、年を追うごとにアメリカ理事会は、牧師、伝道師の謝儀および教会運営のために多額の資金を要請されていた。ベンネット師は、日本人と宣教師との間に見解の相違する問題に言及している。日本人相談委員会は、伝道師の謝儀と請求書の特定方法について見直すことを決めた。が、必ずしも上手く結論を出すことができなかった。その理由は、同委員会と宣教委員会のどちらがどのくらいの裁量権を持っているかについて双方に誤解があったからである。

(アメリカ・バプテスト宣教師ロバート・ステイブンス要約)

[上記は、左記に掲載した英文要約の和訳である。学院史資料室 潮沼達也訳]



▲直筆原稿6頁あるうちの1頁目。



▶ 5頁目の最終部分
 A. A. ベンネット博士のサインが記されている。

渡部一高——(1902~1975)

元 関東学院社会事業部教授・大学文学部教授

生い立ちと略歴

渡部一高は渡部元(1877-1958)の長男として根室に生まれた。弟には相川高秋がいる。父親の元は新潟県の旧高田藩士豊次郎の子として生まれた。1886年に一家は北海道であった開拓のための屯田兵として根室近郊の東和田村に移住した。そこで豊次郎と元は根室バプスト教会に出席した。少年の元は1892年7月10日にW. B. パーシュレー(1859-1930)からバプテスマを受けた。1895年には元は築地に新設された東京中学院(関東学院の前身校のひとつ)に入学し、第1回卒業生となった。

さらに元は横浜バプテスト神学校(これも関東学院の前身校のひとつ)に進み、1901年に卒業して根室バプテスト教会に赴任した。その長男である一高は1902年9月3日に当地で生まれた。父親の元は各地で牧師をした。後には1927年に財団法人関東学院理事長となっている。

根室バプテスト教会の歴史について、もう少し紹介しておこう。まずC. H. カーペンター(1835-1887)はハーバード大学およびバプテスト系のニュートン神学大学院に学んだ。彼は若き日にミャンマーにあったヤンゴン・バプテスト神学校で6年間教えた。さらにバセイン河流域において教会と学校の設立にかかわり、またカレン族の間で宣教活動に従事した。彼は1880年健康を害したため帰国していたときに、B. S. ライマン(1835-1920)著『北海道調査報告書』を読む機会があった。北海道はニューイングランドと風土も似ているし、彼はアイヌ宣教を志していたので1886年に根室にやってきた。豊次郎と元が根室に移住した年のことである。だがわずか数ヶ月でカーペンターは急逝した。しかし妻のハリエットは夫の遺志をついで根室を拠点に宣教を続けた。

パーシュレーはブラウン大学とニュートン神学大学院に学んだ。彼の妻の叔母がカーペンター夫人、ハリエットであったので、彼女を支援するためもあり、1890年に根室に派遣された。1894年にはパーシュレーは横浜バプテスト神学校に招かれて、旧約聖書と教会史を教えた。1908年には同神学校長になっている。

長男の一高は父親の転勤に伴い、東京に来て東京学院中学部に入学した。しかし1917年には中学部が閉鎖されたため、青山学院中等部に編入した。1923年には青山学院高等部英語師範科を卒業した。その年の9月

に一高はコルゲート大学3年編入を認められた。1925年6月には神学士を取得、続いて1926年には大学院に学び、文学修士を取得した。その後、7月にはオックスフォード大学リンカーン・カレッジに在籍して、研究を続け、さらにドイツにも渡ってヨーロッパにおける社会学の潮流について見聞を広めた。

一高は1927年に関東学院高等部に社会事業科を開設するために、急遽帰国した。

一高が学んだコルゲート大学についても、紹介しておきたい。この学校は1817年にニューヨーク州バプテスト教育協会によって設立が決定された。1819年にはマジソン郡にハミルトン文科・神学大学として出発した。1846年にはマジソン大学という名称になった。その後、石炭会社の経営者、コルゲート家の寄付を受けて、コルゲート大学となった。2012年発行の『US ニュース・アンド・ワールド・レポート』誌によれば、アメリカ国内リベラル・アーツ・カレッジの中で21位の高い評価を受けている。一高は1953年に一年間、フルブライト交換教授として母校コルゲート大学で日本思想史を講義したことがある。

オックスフォードのリンカーン・カレッジは、創立は1427年で、39あるカレッジ中で9番目に古い。

実はニューヨーク州の西部地区にはもうひとつのバプテスト系のロチェスター大学がある。この大学は1850年にニューヨーク州西部地区のバプテスト諸教会の協力によって設立された。1928年、神学大学院のみが連合体を形成しており、今日では、コルゲート・ロチェスター神学大学院/クローザー神学大学院となっている。C. B. テンネー(1871-1936)とW. アキスリング(1873-1963)がここで学んだ。実はこの学校には1897年以来アメリカ・プロテスタントに大きな影響を与えた人物が教えていた。ウォルター・ラウシェンブッシュ(1861-1918)である。若き日の渡部一高もこの学者から刺激を受けたといえる。また関東学院神学部には、友井楨教授がラウシェンブッシュの著作を翻訳していた。その訳書は『基督教と社会の危機』(原書初版 1907年、邦訳 1923年)と『社会的福音の神学』(原書初版 1917年、邦訳 1925年)である。日本の若いキリスト者学生たちはこれらを熱心に読んで



▲ニュー・ファミリー・センター1981年発行『渡部一高先生のエッセイに学ぶ』掲載の渡部一高先生写真・サイン

共鳴していった。渡部はアメリカ留学中にラウシェンブッシュの著作を読んで深い感化を受けていたことは、後に紹介するセツルメント活動のための印刷物から十分推し量ることができる。

ラウシェンブッシュの父親はドイツ系バプテスト派の牧師で、ロチェスター神学大学院のドイツ語部門の教授であった。彼はその学校を卒業して、ニューヨーク市の貧民街、いわゆる「ヘルズ・キッチン」地区に住むドイツ人移民の牧師として10年間働いた。ここで彼は労働者たちがどんなに搾取されているかを直接にその目で見た。しかも行政当局はこの現状をまったく無視していた。彼はヘンリー・ジョージ(1839-1897)のような経済学者・社会学者と交流し、社会のあり方について新しいモデルを示そうとした。敬虔主義的な熱意と社会的な行動を結びつけていたラウシェンブッシュは、社会がキリストによってあがなわれなければならないと説いた。彼はアメリカにおいて19世紀末から20世紀初めに広く影響をもたらした社会的福音運動の指導的な神学者となった。彼は母校のロチェスター神学大学院の新約聖書および教会史教授をつとめている(1897-1918)。1913年にニューヨーク時代を回顧して彼はこう述べたことがある。

「そこで、私は、宗教問題と社会問題が関連していることを理解し始めた。」

富田富士雄の回想から

渡部の下で学び、本学教授となった富田富士雄は関東学院大学文学部『紀要』第21号(1976年)において「渡部一高先生の人・学問・思想」を書いている。これを手がかりに、その業績をたどっていきたい。

「渡部一高先生は1927年2月米国と英国の留学を終え帰国後まもなく、その年の4月に開設された旧専門学校令による関東学院高等学部社会事業科の教授に就任した。この社会事業科は1929年に社会事業部となり1937年まで続いたのである。」

当時は都市の中にも農村にも貧困問題を中心に社会問題が深刻な様相を呈し、その対策が緊急な課題となっていた。そしてこれへの対応としての社会事業での分野でも、従来の慈善事業から脱却、近代化の必要が叫ばれ、またそのための専門的教育が、社会的にも要請されていた。…このような時代に、関東学院社会事業科(後に社会事業部)が開設されたのであった。」

「関東学院社会事業部では渡部先生は、社会学、社会思想史等の講義を担当したが、社会事業概論はこの分野での日本における草分けともいえる。」

当時、高名な生江孝之、三好豊太郎、佐原六郎が講義に来ていた。また開校記念講演会には社会運動、革新的政治運動の先駆的指導者であった安部磯雄氏と、イギリス産業革命研究の第一人者であり、トインビー・ホルの名を日本の学会に広く知らせた東京商科大学、

今の一橋大学の上田貞定次郎教授を講師として開かれ、広く注目をひいた。

「このように関東学院社会事業科は、新鮮な気風の中で、スタッフも充実して出発したのだが、なんといつでも、その中心は渡部先生であった。…その該博な学識と魅力ある人柄で、学生を指導し、疾風怒涛の時代の中で、関東学院社会事業部の存在にその社会的意義を持たせたといつてよいだろう。」

関東学院社会事業部での渡部先生を考える時、忘れてならないものにセツルメントがある。渡部先生は社会事業部学生の実習の場としてセツルメントをとりあげた。(セツルメントの活動については項目を改めて紹介したい。)

富田富士雄は教育者としての渡部について、こう記している。

「渡部一高先生は優れた教育者であった。若い人たちばかりでなく、多くの成人男女が先生の周囲に集まり、教えを受けた。関東学院時代も、戦後のニュー・ファミリー・センター時代もそうであった。また日本人ばかりではなかった。」

「渡部先生は社会事業科時代の初めの1,2年間、そして社会事業部の最後の1,2年、関東学院中学部で英語を教えたことがあったが、このときは、生徒の英語の力を強化したばかりでなく、人間的にも影響したことが大きかった。私も旧制中学の5年生の時に、渡部先生に英語を教えられたのだが、この時の同期生の中から、神学部予科を含めて、社会事業科へ進学したものが5人もあったのは、渡部先生の影響が、いかに大きかったかを示しているといえよう(このときの社会事業科の入学者は全部で11人であった。)」

「戦後、先生は母校の青山学院大学で、そして最近では、新設の関東学院文学部で教授として毎週講義を担当し、それを最後まで続けられた。それを受講した学生たちは、その学識、説得力、そしてその魅力ある人柄に深く感銘を受けたことを語っている。専門の学問を通して教育者は、自分自身、常に勉強家でなければならないが、渡部先生はこの点で誰にも負けなかった。私自身学生時代に、夏休み休暇が終わって、教室で先生から休暇中に読まれた本を多数紹介されて、如何に先生が読書人であるかにいつも驚かされた。最近でもそうで、ある日大学の講師室で、お茶を呑みながら先生はいわれた。『私は毎日100ページ読むことにしています。平均寿命まで生きてあと——年、日数にしてあと——日、それまでにあと——ページ読めませんかね』と。私も先生に負けずに勉強しなければいけないと思った。渡部先生は最後まで私の先生であった。」

渡部一高の学問と思想

このテーマについても、富田富士雄の回想に基づき紹介したい。

「1929年4月から、私は渡部先生の社会学の講義を聴いた。このときの先生の立場はアメリカ社会学であった。私たちはウォード(L. F. Ward 1841-1913, ブラウン大学社会学教授-注。以下も同じ。)やギディングス(F. H. Giddings 1855-1931, コロンビア社会学教授)、マッキーバー(R. M. MacIver 1882-1970, コロンビア大学社会学教授)等アメリカ社会学者たちの学説を教えられた。私はこのとき『社会力』というようなアメリカ社会学特有の概念を知った。」

渡部が帰国して教え始めてから2年後のことである。渡部なりに十分に諸学説を咀嚼しての講義であったであろう。

「渡部先生のアメリカ留学の時期は1923年から1926年までであった。この時期のアメリカ社会学界は、ヨーロッパのそれから脱却して、その特色ある成果によって世界の社会学に貢献するようになった時期であった。1921年にはシカゴ大学のパークとバージェス(R. E. Park 1864-1944, E. W. Burgess)編著の社会学概論“Introduction to the Science of Sociology”が出版されている。これはアメリカ社会学の名著のひとつで、広く読まれ、シカゴ学派の理論的な基礎となった。(私は学生時代、渡部先生にこれを紹介されて、学校の図書館から借りて読んだが、図書館には約10冊備えてあった。渡部先生が指定して買わせたのであろう。)」

講義の内容や図書の実用からも、当時の高等部社会事業部の教育レベルの高さを推し量ることができる。

「先生は帰国後、これによって(上掲書-注)社会学の講義をしたのであった。アメリカ社会学、特にシカゴ学派の特色のひとつは、社会問題に対する関心が強いことである。これは渡部先生の中に強く現れ、当時の深刻な社会状況に対しても深い関心を持ち、それが理論研究にも、社会事業部における教育実践とも結びついていたと思われる。」

1928年には教育実践の場としての関東学院セツルメントが渡部を中心にして始まっていた。この時期はまだまだ1923年に起こった関東大震災から立ち上がることができなかつた。やがてそれに加えて1929年10月24日にニューヨーク株式市場が大暴落し、大恐慌が始まった。このような時代に社会学者として真剣に時代を見詰め、実際に底辺の労働者たちの生活を支援して苦闘していた渡部は、次第にマルクス主義に接近していった。

富田はこの時期の渡部の思想遍歴をこう表現する。

「現実科学として大きな成果を生んだアメリカ社会学を基礎として渡部先生は、急速にマルクス主義に傾いた。当時の日本では、深刻な社会情況に、理論的にも実践的にも最も鋭く勇敢に対応していたのはマルクス主義の立場であった。この場合、渡部先生はアメリカ社会学を棄ててマルクス主義に変わったのではなく、社会の現実的課題への対応ということで、ア

メリカ社会学からマルクス主義へと強く連なって行ったのではないかと思われる。渡部一高先生は、専門の学者としてその理論を体系化することよりも、現実に対応でき、役に立つ知識を求めることを重視していたとってよいだろう。」

関東学院社会事業部とセツルメント活動

渡部は旧制専門学校令による関東学院社会事業部学生の実習の場としてセツルメント活動を始めた。すでにロンドンにおいてはトインビー・ホールがあり、シカゴではハル・ハウスの活動があった。日本でも神田三崎町に片山潜らがキングスレー・ホールを始めていた。本所地区には末広厳太郎の下で東大セツルメント活動も行われていた。

関東学院社会事業部の学生の活動は、最初は横浜市南区南太田町で始められた。その後、京浜工業地帯の一角、横浜市神奈川区神奈川通り9丁目に拠点を移した。ここはJR線と京浜急行線が並行して走る線路と第一京浜国道の間の地域である。当時この場所は、神奈川・鶴見地区の工場で働く下層労働者と日雇い労働者が住んでいた。トンネル長屋といわれる住宅がいくつも並んでいて、その間に通路があった。畳敷きの部屋は板で仕切られ、ひと部屋毎に一家族が住んでいた。共同炊事場があったが、部屋の外にブリキのトタン板を使って軒を出し、その下が炊事場であった。住民たちは近くの捨て場から石炭ガラを拾ってきて、七輪で調理していた。

このトンネル長屋の一部屋を借りて、関東学院セツルメントは出発した。有志の学生がそこに住み込んでいた。ここを中心に子ども会、日曜学校、婦人会、労働学校が開かれた。フィリピンで日本兵によって殺されたコベル夫妻も積極的に参加している。もちろんこのセツルメントの指導者は渡部一高であった。そのうちに専用建物の必要が痛感され、手ごろな空き地を借地することができたので、渡部の指導の下で、募金運動を開始した。やがて約500平方メートルの土地に約165平方メートルの木造平屋の会館が落成した。この会館は「前進館」と名付けられた。この名称は渡部がフランス国歌の楽譜に合わせて作詞した自分たちのセツルメントの歌に由来する。このような歌詞である。

「見よ、真理の日の出

聴け、自由の歌

暗き夜は去りて 輝く朝きぬ

鎖解き放ちて 前進するは今ぞ

血にまみれし 同胞と共に

正義の剣かざして

いざ 戦わん 人のために

前進 前進 前進せよ

勝利の日まで——」



セツルメント指導者の J. H. コベル宣教師が撮影したと思われる「ティパーティー コベル氏」と書かれたキャプション付の写真。中央に渡部一高教授が、右隣りにはコベル夫人、前列にはコベルの子が関東学院セツルメントの子どもたちと一緒に写っている。

「関東学院セツルメント」案内書に、渡部はその設立意図と経過を記している。(今日では不適切な表現とされるところがあるが、歴史的な記録であるので、容赦いただきたい。なお読み易くするために、句読点を入れたところがある。)

「理論と実践、信仰と行為、これらの対立が若き青年学徒の現身中に挙揚されて、ひとつの生きた統一となったのが、我々のセツルメントである。実践の伴わぬ理論は空虚であり、理論なき実践は盲目であると信ずると共に、我々は行為の伴わぬ信仰は死にしもの、信仰を欠く行為は無意義なものであると確信する。故に両者の不可分性を叫び、其の完全なる一致を闘い取らんとする我々は、一方に於いては純情の焰にきよめられ、他方においては氷の如き理性に導かれて、ひたすら、隠れた見えない努力を続けてゆく。これは単なる感情でもなく、手段でもない。それは厳然として我々に迫る至上命令であり、おごそかに響く神の声である。」

ここに「人になれ、奉仕せよ」の実践例を見ることが出来る。「我々に迫る至上命令」は「神の声」として受けとめられている。

最初は学校に近い場所にセツルメントの拠点を置いたが、別な場所に移転した経過が報告されている。1928年3月15日に南太田庚耕地の長屋の一部屋を借りて設立されたが、都市改良区域に指定されたため、そこにいた住民が移転させられてしまった。このため10月に神奈川県浦島町に移った。ここでは約100世帯を対象として活動できる場所だという。

活動方針として5項目が掲げられている。これは簡潔な英文で表現されているので、参考までにそのまま紹介しておきたい。

OUR FIVE PRINCIPLES

1. Not Alms, but friends.
2. Not to invite, but to go.
3. Every activity educational.

4. The Center not in an office but on the field.

5. Work without enthusiasm and an Ideal is vain.

この後に出された印刷物では、1と2が入れ替わっている。さらに4がなくなって、5が4に上がって、5には次の文が入っている。

Character renovation through applied religion.

Not alms, but friends. この alms は「施し、慈善」の意味である。ギリシア語の語源では「あわれみ」に由来する。ここでは、上から下への「慈善」ではなく、「友、仲間」となろうとする。

Not to invite, but to go. ここでも上から下への「招き」ではなく、現場に自ら「出かける」のである。

Every activity educational. educate とは「教育する」という意味だが、「養う、育てる」という含蓄を持つ。さらに educate 「引き出だす」ともつながる。セツルメント活動は社会改革にいたるべき大きな目標があるとしても、各人の人間性の涵養が忘れられてはならないのである。

The Center not in an office but on the field. これは後の印刷物からは消えている。この方針が変更されたわけではない。他の文章からもわかると判断されたのであろう。office (研究室)ではなく、field (現場)が中心でなければならないとしている。

Work without enthusiasm and an Ideal is vain. この enthusiasm は「熱意、熱狂」の意味があるが、ギリシア語やラテン語の語源では inspiration の意味をもつ。心に突き動かすものや燃える理想がなくてはこの活動は続かないし、遅かれ早かれ燃え尽きる。それゆえ次の言葉に言い換えられたのであろう。

Character renovation through applied religion. この character は「品格、品性、人格」を意味する。これは法律・社会制度・権力・科学によって変えることはできない。キリスト教信仰による人間のつくりかえが大切であるとする。

これらの方針が建学の精神や校訓にどんなに即していることがわかるであろう。

「関東学院セツルメント概要」には、活動の目的と活動内容が示されている。

「セツルメントを中心とせる小区域に生活し、経済的及社会的に圧迫されつつある人々の包括的生活全体に、新展開を与えんとして下の如き事業を行いつつあり。」

1. 情操教育 1週数回、4、5歳より16、17歳までの少年少女を対象に、音楽、絵画、お話会、図書貸し出し、学芸会など。
2. 知識教育 1週2回、夜間授業補習。
3. 宗教教育 1週1回の日曜学校、すべての機会を利用してキリスト教信仰の養成につとめる。
4. 裁縫手芸など 1週1度 専門家の指導、生活補助の意味も含めて内職を指導。
5. 貯金 貯金する心がけこそ貧困問題の解決の一助となる。
6. 衛生 他の社会事業団体と連携して衛生思想の普及に努める。

7. 身の上相談 「絶対に施すことをせず、慈善ということ
を避ける我々は、彼らのもっとも親しき友となり、家事
万端の相談相手となる」という。家庭問題、職業紹介、
手紙代筆なども行う。
8. 娯楽 「娯楽の向上は人格の向上に正比例する」という
視点から、レコード鑑賞、素人演芸大会、遠足、見学、
運動などを通じて指導するという。



「渡部一高教授夫妻と学生たち」

このセツルメント活動は、1928年から1937年まで約10年間続いた。時代は軍国主義に向かい、社会の貧困や抑圧について論じ、また实际的な社会改良と救済活動を行うことが社会主義として弾圧の対象となった。これに関わる学生たちが逮捕され、とうとう関東学院社会事業部は閉鎖された。したがってセツルメントも閉鎖された。その閉鎖を伝える挨拶文が残されている。これは渡部一高のセツルメント総主事として書いたものである。一部を紹介しよう。

「昭和初期より今日までの凡ゆる社会的な暴風雨中にあって、我々の為の精神的な道場であり、理論的な実験室であったこの懐かしいセツルメントが、其の姿を消すということは地区の人々にとってというよりは、寧ろ我々職員にとって非常な打撃で御座います。

併し我々は少しも後悔しておりません。過去十年間の仕事が輝かしい結果を生んだというのではなく、その成功と失敗の一つ一つが凡て真剣な努力であり闘いであったという誇りと喜びとがあるからであります。

我々が播いた種が一度地におちて死ぬのであります。併し其の死によって、より高度な発展が約束せられ、何時かは其れが三十倍六十倍になって、刈り取られる時が必ず来るという確信をもって、看板を下ろすので御座います。」

ここに約10年間であったが、机上や研究室における議論、教場での講義を越えて、渡部を中心として「人になれ、奉仕せよ」の社会実践があったことを高く評価しなければならない。

ニュー・ファミリー・センターの活動

1950年に渡部は社会教育団体であるニュー・ファミリー・センターの設立に参画し、理事になっている。これは連合国軍総司令部将校夫人、キリスト教界、財界、政界などの人たちの協力を得て設立され、渡部は

生涯の最後までこの運営に精力を注いだ。この団体の会長をしていた工藤昭四郎はこの会の目的をこう記した。「日本人に最も欠けていると思われる自主的・総合的判断力を養成するため、老若男女が一切の差を忘れて一堂に会し、一家族のように団らんし、親しく交わり、自由に話し合うことによって、その精神を体得することにあります。」

富田は渡部が「戦後日本の荒廃、特に青少年の状況をみて」ニュー・ファミリー・センターをつくったという。渡部は戦前の日本社会の問題を回顧し、反省の上に立って、戦後の新しい日本社会の形成のために各界の人たちをまき込もうとした。渡部の語学力も手伝って、多くの外国人もこの団体の会員として参加していた。ニュー・ファミリー・センター編集・発行の『追悼 渡部一高先生』（1976年）にはなんと約170人もの方々からの追悼文がまとめられている。渡部は在日米軍司令部広報部文化顧問をしていた関係もあり、その中には多くの外国人の名前も見られる。ユダヤ教ラビのトケイヤーの名前もある。この団体は講座、講演会、ゼミナール、討論会などを開催していた。渡部自身も社会思想史を毎週講義していた。

ここでは、戦前から戦後への変遷について、渡部がどう受け止めていたか講義の中から一部紹介したい。（これは英語で発表したものであるが、ニュー・ファミリー・センターは日本語訳を付加している。）

「真珠湾攻撃が行われた時、我々は半信半疑ながら東條大将に喜んで従い協力した。神風特攻隊員は、こうした残酷な作戦が敗北を意味すると知りつつ、喜んで敵艦の甲板に突進した。占領が開始されると、GHQからの沢山の厳しい改革指令を歓迎して受け入れた。・・・我々はアメリカ的なものなら何でも熱心に学んだ。多くの法律、制度を喜んで変えた。日本は新生した。驚くほど短期間に街を復興し、人心を立直らせた。

このような敗戦や占領がなかったら、日本は旧来の陋習を改めることはできなかったであろうし、このような苦悩なくしては、多くのよい習慣を確立することはできなかったであろう。」

渡部は日本人の長所も短所も熟知しており、戦前・戦中・戦後を生きた社会学者として日本人にも、アメリカ人にもわかりやすく日本人の心性を説明し、日米の相互理解に貢献してきたことが、ここからもわかる。

「関東学院セツルメントと横浜市」

これは関東学院セツルメント発行の謄写版印刷による機関紙『世の光』第2号（1928年）にC. B. テンネーが寄稿した英文原稿の日本語訳タイトルである。テンネーは1919年に横浜市南区三春台に中学関東学院を開設し、1927年には東京学院から高等学部と神学部を移設して、中学部、高等学部、神学部からなる財団法人関東学院を立ちあげた。彼はアメリカ神学界で著

名な「社会的福音」の指導者、ウォルター・ラウシェンブッシュが教えていたロチェスター神学大学院で学んでいる。関東学院社会事業科ができたのはテンネーが抱いていた夢の実現でもあったとも言える。この原稿の前半では、アメリカの支援者に配慮して、関東学院セツルメント発足の経過を述べている。後半はラウシェンブッシュの『私たちの町』と題する祈りを引用して、日米の共通の祈りの課題としている。すでに紹介したようにラウシェンブッシュは若き日にニューヨークの貧民街にあったドイツ人移民が集まるバプテスト教会の牧師をしていた。そこで大都市のひずみとそれに対するキリスト教の社会的な責任を意識するようになった。テンネー自身も学生時代にニューヨーク州西部にある大都市、ロチェスター市の貧民街で奉仕活動をしたことがある。ラウシェンブッシュのニューヨーク市のための祈りをテンネーは横浜市のための祈りにそのまま用いたといえる。実はラウシェンブッシュは彼の祈りを自由に引用することを許可していた。それゆえ横浜市に当てはめたのである。以下はテンネーのそのまま掲載された英文原稿の紹介である。関東学院セツルメントの起源と思想的な背景の理解のために役立つはずである。

「私たちの高等学部社会事業科はセツルメントを開設した。これは社会事業 (social service) のさまざまな分野で働く人々を養成するために設立された。このセツルメントは学生たちには社会の状況を直接に観察する機会を与えることになり、また教室で学んだ原則を適用する技能を獲得させることになるものである。もちろんこのような活動が社会問題解決のために万能な手段であるとは言えないかもしれない。しかし私たちはいくらかの成果をあげてきた。

関東学院社会事業科が開設された時とほぼ同じくして、セツルメントを出発させることができたのは喜ばしい。渡部一高教授と夫人の花子さんの忠実な指導の下で、関東学院セツルメントは学生たちに充実した訓練を行ってきた。そればかりでなく、セツルメント周辺に住む多くの市民たちに祝福をもたらした。この地域には行政の恩恵があまり届かず、ここの人々は生きるための最低限の必需品さえほとんど持ち合わせていない状態である。私たちがセツルメントを最初に開設した場所は、横浜市の再建計画の事業のために殆ど跡形もなく変わってしまった。その結果、このたびのセツルメントは学校から少し離れたところに移転した。そこは以前の場所と同じようにセツルメント活動を必要とするところである。しかもここは横浜市の再建事業がまだ手付かずの状態である。この地で、私たちは学生たちを訓練し、彼らを介して近隣の人たちに支援の手を差し伸べている。

このセツルメント活動は大きな障害に遭遇したにも

かかわらず、成果をあげてきた。トンネル長屋の中の向かい合う二つの部屋には、直接に外に行ける入り口がない。入り口ははるかに先のところにある。私たちはそのような部屋に少年たちや、少女たち、老人たちを招き、奉仕しようとしてきた。しかし十分に適切な空間が備わっていない。だがすでに少額だが基金が手元にあるので、できる限り早い時期に、関東学院セツルメントの質素でも、活動にふさわしい会館を建設したいと願っている。十分な支援があれば、子供たちのために遊び場のある敷地を購入したい。私たちは横浜市の中でも、特に貧しい人々の住む地域のひとところ、ささやかな奉仕をしているが、現代の聖人が訴えた精神によって、私たちも奉仕したいと願っている。その聖人はニューヨーク市のためにこのように祈った。(ラウシェンブッシュ『社会的な目覚めのための祈り』) 『神さま、私たちが大好きで、自慢しているこの町のために祈ります。

この町は広く、美しいです。繁華街や、倉庫、工場もあります。力をあわせて働いている人たちがいます。心が結ばれた家庭で団欒の時を過ごす人たちもいます。『私たちの町が、共に力を合わせることでできる場所になるようにお助けください。だれもが自分の居場所と役割を見つけることができ、毎日、それぞれの人生を築きあげ、不屈の人になり、技能と知性をもって、最善をなそうと熱望することができるようにしてください。この人たちが家庭をもっと広く開放して、そこで、すべての人が安らかに、不安のない生活を送ることができ、穏やかに愛する人と睦み合い、健やかに歳を重ねることができるようにしてください。』 『お金に縛られることがなく、隣人たちと善意をもって接し、人生を輝かせ、心をときめかせ、喜びを分かち合うことを誇りとして、市民たちが結ばれるようにしてください。真の富と偉大さとは、財産の豊かさではなく、この町が公正さと友愛に満ちることこそ、この町の将来のすぐれた目標であることを思い起こさせてください。この町の息子たちや、娘たちを、励ましてくれる高貴な情熱が、真に活かされて、この町を豊かにし、そして世界に知られるようにしてください。』 『公正な町をつくろうという幻を与えてください。誰もが他者を搾取しないで正義が行われる町、悪徳と貧困が人々を苦しめることのない豊かな町、人々に奉仕することが高く評価され、高潔さが重んじられる、友愛にあふれた町、権力によって強制されるのではなく、すべての人々への愛に基づいて秩序が保たれるような平和な町、生きがいと幸福をすべての人が享受することのできる町をつくることができますように。主なる神よ、私たちの心の中にある無言の祈りをお聞きください。この町に麗しさと公正さが一日も早く実現されるために、私たちは自分たちの時間と力と思いを捧げることを誓いますから。』

渡部一高の生涯を表現する 「墨跡」について



これは『故事ことわざ辞典』（東京堂）によると、孟子の『公孫丑上篇』からの引用である。「我は学びて厭わず、教えて倦まず」と孔子が述べたとされる。この墨跡では「我」を省略して三文字の対句とした。その意味は「みずから学ぶにも、人に教えるにも

も熱心なこと」と上記の辞典は記す。

実はこれは森戸辰男の揮毫である。森戸は社会政策学者であったが、軍国主義下で東京大学助教授の地位を追われた。戦後は、衆議院議員、片山内閣・芦田内閣のもとで文部大臣、後に広島大学学長などを歴任した。森戸は渡部の主宰する「ニュー・ファミリー・センター」に招かれて二度講演をしている。演題は1964年2月には「これからの教育を考える」、1975年10月には「最近の教育について」であった。ニュー・ファミリー・センター発行の『渡部一高追悼文集』編集委員会の説明によれば、森戸は渡部の生涯を象徴するものとしてこの言葉を引用したという。

渡部の研究者・教師としてのあり方・生き方をこれはよく表現している。学問追求に情熱を注ぎ、学問的なすぐれた業績を残して学界で高く評価されることも名誉ある生き方であろう。また高い教養を積み、尊敬される人格を形成して、それに喜びを見出すこともひとつのあり方であろう。しかしそこで終わるのではなく、自らの精力と年月を注いで獲得したものを、次の世代に伝えていくことにも、熱心でなければならないのである。渡部はこのあり方を選んだ。

渡部は、坂田祐が1919年に旧制の中学関東学院の学生たちに始めて訓示した「人になれ 奉仕せよ」をよく知っていた。新進気鋭の社会学者として、旧制の関東学院高等学部社会事業科教授に招かれて、彼が実践しようとしたことが、この言葉にまさに適切に言い表されている。真の学問追求は人格形成につながる。教育は知識の伝達を超えて、学ぶ者たちの人格を高めることを目指す。それはやがて他者への奉仕、社会への貢献に向うことになる。

この三文字対句には「我（わたし）」と「他者（なんじ）」が隠れているが、無視されたり、否定されたりしているのではない。「わたし」の存在そのものが人類の祖先である「他者」に負っている。学びは先駆者である「他者」の遺産から謙虚に汲み取ることから始まる。次にそれに留まることなく、学び取ったものを深め、高めて、伝え、次の世代である「他者」の「よりよきいのちの質」向上のために用いるのである。「他者」→「わたし」→「他者」の深い連鎖の構図がここにある。

渡部一高が若き日にセツルメント活動に情熱を注いだのは、人々（他者）との連帯を意識していたからであろう。しかも彼は社会の片隅の貧しい人たちを「同胞」（近い他者、つまり隣人）として受入れて、直接的な奉仕に向った。晩年は「ニュー・ファミリー・センター」を立ち上げ、これに集中した。各界の人々を広く招き、指導的な人たちの意識の向上につとめた。わたしたちは生涯を通して「受ける者」であり、そして「与える者」でなければならない、だれでも「学ぶ者」であり、「教える者」でなければならない、と渡部は認識していたのである。



▲(この写真に名前が付せられたのは追悼文集(1976年)発行の時点である。そのため「故」が付せられた方とそうでない方がある。中居先生が誤って「中井」となっている。)



▲◀1976年ニュー・ファミリー・センター編集・発行『追悼 渡部一高先生』掲載写真

関東学院セツルメント竣工式(1931.3)

大学講堂兼礼拝堂の鐘

1965年に大学講堂兼礼拝堂が取壊された時に、そこに吊られていた。実はこの鐘は廃棄される寸前であった。その時、工学部機械工学科の佐藤和雄教授（現・大学名誉教授）が大事に保管して下さった。その後、同教授は退職時に後任の辻森淳先生に保管を託された。

このたび工学館取り壊しに際して、その貴重な鐘を学院史資料室に寄贈していただいた。

この鐘と大学講堂兼礼拝堂の説明を含む文章「関東学院大学礼拝堂の歴史と意味」が、大学宗教教育センター発行『告知板』（第205号）〔執筆者：高野進 宗教主事（当時）〕に掲載されていたので、ここに引用抜粋する。（学院史資料室 瀬沼達也）

1945年の戦災により三春台の校舎がほとんど使用不可能な状態になった。1946年に中学部と工業専門学校が六浦に移転した。ここは、旧海軍の航空技術工員養成所があったところである。この土地と建物の購入は、アメリカ・バプテスト教会の援助によった。その年に、経済専門学校の設置が認められ、開校した。このようにして、工学部と経済学部の母体が揃ったのである。

1948年に提出された「関東学院大学設置申請書」では、「目的及使命」を次のように示している。「本大学は、基督教に基づく人格の陶冶を旨とし、教育基本法に則り学術の理論及び応用を教授するを以て目的とする。」当時の坂田祐学院長兼大学長は、1950年の『湘南評論』に次のように述べている。「本学院創立以来、『全世界にもまさる』個人の霊性を陶冶し、十字架を負うて奉仕するの精神を涵養せんとして、『人になれ、奉仕せよ』とは、常に高叫して来た基督教に根底を置く校訓である。基督教の根底なくして真の文化国家、平和国家の建設は出来ない。これは我が関東学院大学の確信である。」（『関東学院百年史』595、596頁）。当時、先生は五つの努力目標を語っている。第一は、図書館の充実、第二は、教授研究室の整備、第三は、礼拝堂の新築、第四は、教授陣の充実、第五は、神学部の設置であった。第三の「礼拝堂の新築」については、このように述べている。「礼拝堂の新築によって、大学の学的標準を高めると共に、学内の基督教精神の拡充徹底を促す。現在の礼拝堂は、旧海軍の食堂を改造したもので、甚だ不完全なもので、速やかに立派な礼

拝堂の建設が必要である。」このように礼拝堂の建設は大学設立以来の宿願であったことがわかる。1951年の『学生心得』には、毎日行われている礼拝に、全教職員と共に全学生も出席することを原則とする、とある。大学礼拝が行われて



ていた講堂は、現在の経済学部のある七号館のところにあった。そこには、大きな木造の一階建が建っていた。北側は、さんようホールと呼ばれる集会室があり、そこにオリーブの三葉のマークと鐘が取り付けられていた。この鐘は旧日本海軍の駆逐艦についていたものであったという。それが礼拝の時を告げる平和の鐘として用いられるようになったのである。南側は、講堂になっていた。記録によると、この建物の坪数は660.29坪、収容人員は、590人であった。古い旧海軍の食堂が別な高次の使命のために用いられていたのである。礼拝は月曜日から金曜日まで毎日行われていた。時間は、午前10時10分から40分であった。

岡本石根名誉教授は当時を思い出してこう記している。「工業専門学校の開設から昭和24年新制大学への移行の数年は、文字通り関東学院の嵐と窮迫の時代であった。貧しい建物と無に近い設備の中で苦戦が続いた。が、学生と教職員がキャンパスに生活を共にして、その日常性と職場の連帯感が、学内を意外に明るい楽しいものにしていった。戦後ながら、新しい希望があったから。

戦時技能者の大食堂は、心の「かて」をおくる礼拝所に変わり、平和の使者となった。切妻の屋根につけられた三葉のしるしと鐘は、貧しいながら学校のシンボルであった。このマニフェストは、批判の中にも、ともかく心の支えとなっていた」（『関東学院通信』第7号）。

講堂内は、確かに必ずしも明るい照明ではなかったし、冬は暖房もない状態であったが、そこで毎日礼拝が行われ、物質的には豊かでない時代に、心の豊かさを養われたのである。

この講堂兼礼拝堂は、1965年に経済学部がある現在の7号館が建設されるために、取り壊された。

〔一部は現在状況と異なる記述もあるが、そのまま引用した。〕

資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆様には学院に関する資料・情報の提供をお願いいたします。現在の教職員の皆様には各学校、各部署等で発行されました刊行物を一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようお願いいたします。（関東学院 法人事務局 学院史資料室）

六浦校地（金沢八景キャンパス）の取得について

再建への準備

終戦の詔勅が発せられた〔1945（昭和20）年〕8月15日の翌日から学院では平常通り授業とのべたが、授業といっても、ほとんどが勤労働員で、これが準正課として取扱われていたので、夏期休暇などはなかった。1、2年生なども近くの貯水槽造りや、防空壕造りの作業をしていた。終戦になってからは、勤労働員の必要もなくなり、上級生なども学校へ登校して授業するので校舎はどうしても必要であった。三春台の焼けのこりの中学部校舎での、中学部、専門学校、捜真女学校の三部授業は、狭いためこのままではいかんとも仕方がなかった。10月19日から航空工業専門学校は航空をとって工業専門学校に転換していたので、軍部の施設の中で、工業専門学校に適した校地、校舎、施設がないものかと物色しはじめた。この時工業専門学校の数学の教師として迎えられていた田畑という先生が、神奈川県軍の施設にくわしく、また地理にも通じていたので、古賀武夫と二人で、約1か月ほど手弁当て探しまわった。やっと金沢八景で名高い磯子区〔当時、六浦は磯子区であり、金沢区は1948年5月分割された〕六浦に、旧海軍の航空技術〔廠〕工具養成所を見つけた。早速古賀武夫が、まだ海軍省が存在していて残務処理を行っていたので、海軍省に交渉に行った。ところが省内は混乱しており、その直後陸軍省、海軍省は解体となり、復員業務だけを担当する復員省となった。陸軍、海軍の施設いっさいは、大蔵省管轄となったので、今度は大蔵省に払い下げを前提として無償使用の交渉に行った。しかし大蔵省では、学校教育のことは文部省を通して申し入れてくれとのことで、早速文部省へ払い下げ交渉に行った。担当の課長は、古賀武夫の大学一年の後輩であったが、役人風を吹かせてなかなかおいそれと承諾してくれそうもなく、そしてすでに神奈川県立第一中学（神中）からも使用の申請が出ているから、折半して使用してはどうかなどと言った。古賀はなお粘って、神中は県立の学校であるから神奈川県で考えればよい。こんな非常時の時は、何の援助も得られない私立学校こそ、国が援助すべきではないかと主張し、その上関東学院の方が申し込みが先であるから優先的に考慮してほしいと重ねてお願いした。しかし文部省大蔵省には神中の卒業生も多くいる関係から、このままでは、形勢不利であると考え、G・H・Qに直訴することとした。1945年12月のはじめ、古賀武夫は英語に堪能な時田信夫、相川高秋の二人を伴ってG・H・Qを訪れた。当時マッカーサー司令官は横浜山下町のホテル・ニューグランドに滞在していて、終戦処理にあたっていた。学院の苦しい事情を訴え、

文部省に働きかけてくれるようにと請願書を提出した。つづいて第二回は12月6日と7日、第三回は12月10日と請願しつづけた。この時の請願の通訳にあたった時田信夫の話によると、この時すでに、第一番目に、神奈川県立第一中学〔校（神中）〕、第二番目に、横浜専門学校がすでに払い下げを申請していて、関東学院は第三番目であった。アメリカの大統領トルーマンは、バプテスト教会会員であったので、関東学院もバプテスト教会に属していることなど話しに出て、交渉に都合がよかったが、マッカーサーは特にキリスト教に好意をもつというのではなく、宗教はどれも平等に取扱う方針のように見受けられたという。G・H・Qでは日本での教育方針を立てるため、教育勅語や戊申詔書の翻訳をしていたが、教育勅語はなんとか米語に訳すことができたが、戊申詔書は翻訳ができかねていた。時田信夫に、戊申詔書を米語に訳してみろといったので、早速その場でそれを訳して提出したところ、大変喜んで学院に好意を示すようになったらしく、結局文部省から大蔵省に話があって、六浦の主要施設は関東学院で、一部は神中で使用することが許可になった。1945〔昭和20〕年12月の末のことであった。古賀武夫が、文部省に行くと、課長は、関東学院が使用するようにと取計っていたのに、G・H・Qに頼まなくてもよかったと文句やら皮肉を言ったという。そこで直ちにトラックを用意して、焼け残りの教具などを積みこみ六浦の新校地に移転を開始した。焼け出されて住居を失った教職員には、六浦校地の寄宿寮を提供した。旧海軍の航空技術〔廠〕工具養成所には、校舎、講堂（体育館兼用）、実習工場（旋盤100台備え付け）、製図教室（製図版付きの机100人分）、寄宿寮があり、これらの施設は学院で使用することができ、工業専門学校としての設備は一応整ったのである。神中は、学院の使用しない寄宿寮の一部を教室として使用した。終戦直後アメリカ・バプテスト・ミッションから復興資金援助の申し出があった。復興資金の援助に関して、その条件として学院の教員の（うちクリスチャンを）70パーセントにするという約束を坂田院長が、ミッションに約束したかどうかについては、沢野良一のあと財務部長となった古賀武夫の話では、べつにクリスチャンの教員何パーセントという条件はなかったように思うといっている。六浦校地・校舎・施設の購入資金は、すべてアメリカ・バプテスト・ミッションから無条件で援助を受けたのである。しかし最初の二年間は、大蔵省から借用したので、その使用料を支払っていたのである。この六浦校地、校舎の払い下げによって、その後の関東学院の発展がなされる土台が据えられたのである。



▲六浦校地航空写真（1951年頃）

〔中略〕

〔1944年、昭和〕21年4月から六浦校地に、関東学院経済専門学校を設立し、校長に古賀武夫が就任した。一方、捜真女学校は、〔1945年、昭和〕20年5月の横浜大空襲で焼失したため、中学部校舎を借りて、三部授業したことは、すでにのべた。当時捜真女学校長を坂田祐が兼任していたので、坂田は、前にも計画したこともあり、捜真女学校を女子専門学校にした方がよいと、捜真女学校関係者にはかったところ、中等教育に全力を注いで行きたいということになって、坂田もそれではと、関東学院女子専門学校の設立にふみきり、21年4月、三春台校地に開校され、校長は、相川高秋が就任した。かくして関東学院は、21年4月に六浦校地に、工業専門学校、経済専門学校、中学部が、三春台校地には、女子専門学校が授業を再開したのである。

〔以上の文章『関東学院百年史』（1984年）第8章 戦時下の関東学院 第3節 東京大空襲と終戦（P.420～423）より〕

学園の整備

関東学院大学は校舎を六浦に定めて必要な修理改造を加え、大学昇格を認可されたが、未だ校地・校舎とも大蔵省の所属で一時使用中であった。これを政府より払下げ、大学の所有として永久に基礎を据えることは強い願いであり、学舎・諸設備を完備することは全教職員、全学生の熱望するところでもあった。これにこたえて関東学院と同系の米国バプテスト協会から本学への積極的援助が始められ、全米を通じて募金運動が起った。本学当局からは理事長アキスリング博士が日本における教団の伝道を一時中止して急拠米国に飛び直接的運動に関与し、1950（昭和25）年7月から10月第1日曜までに募金、数10万円が集まった。またアキスリング理事長、坂田院長兼学長、並びに理事、宣教師らの熱心な努力が報いられて同年秋には北米バプテスト伝道外国協会は校地、建物の買収費数万ドルを送る決議をおこなった。もとより払下げは政府も希望したところだったので、手続は順調に進み、翌1951（昭和26）年4月9日に国有地（六浦校地・校舎）の払下げを完了した。これにより関東学院大学は使用中の大学校舎・校地のほか、神高が使用中の校舎・校地の全部を加えて土地3万6000坪、建物8000余坪に、附属住



▲六浦校地（金沢八景キャンパス）航空写真（2008年）

宅四軒、隣接土地小山を含めて3500坪も併せて所有することができた。この払下げに関して坂田学長が1953（昭和28）年4月に六浦と、御殿場東山荘における宣教師会で述べた言葉として、

「三春台の建物は大半空襲に依て焼失し且つ土地は狭く不充分であったので六浦にある政府の校地と建物とを借用することによって大学を設置することが出来た。之をミッションの大いなる補助によって政府から払い下げることが出来て真に感謝である。」

土地は約3万4000坪、建物は約1万坪、時価では約60万ドルであるが、これを9万ドルで払い下げた。現在土地だけでも10万ドルの価値である。

大学の環境として最も適当である。」

と記している。（『坂田祐と関東学院』121頁）

坂田学長によれば、この土地建物を買い取るためのミッションからの条件のうち、(A)大学の性格をキリスト教とする、(B)理事会のメンバーをキリスト教信者とする、(C)理事会にミッションから代表を出す、の三点は関東学院創立の時から実行していたことであり、(D)教員の75%がキリスト教信者であることは、日本の現状では困難であるが、漸次その実現に努力し、(E)学生の50%をキリスト教信者として保持することは勿論のこと100%を目標とすべきであるが、異教徒の国である日本では実現に多年月がかかり大いなる忍耐を要し、(F)自給独立の五ヶ年計画はすでに出来上がってミッション本部へ提出済みだ、と述べている。

〔以上『関東学院百年史』第10章 関東学院大学の新発足 第1節 廃墟の中からの出発（P.598～600）より〕

〔編集後記〕

1945（昭和20）年5月29日、横浜は大空襲を受け、関東学院は三春台校地にあった校舎の大半を焼失した。同年8月、終戦を迎えたが、社会は混乱を極めていた。そのような状況下にもかかわらず、一日も早い復興を祈念し、教育の情熱を燃やす学院関係者は、新しい校地、校舎、施設となるべき場所を探し求めた。

建造物は、土台の上に建てられる。後年もっとも大きな組織となる関東学院大学は、ここに紹介された六浦校地（金沢八景キャンパス）の取得なくしては存在し得なかった。この土台である土地を、だれによって、どのような経緯で入手することができたのか。そのことを知り、感謝し、覚えていることは、学院関係者の責務であろう。

「すでに置かれた土台とは、ほかでもない。イエス・キリスト御自身である。」（柳生直行訳『新約聖書』「Iコリント書」3章11節）

なお、引用本文中の括弧〔 〕内の文章、年号等は、学院史資料室による注記である。（学院史資料室 瀬沼達也編注）

学院史資料展2011 「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』」の教育



関東学院大学東日本大震災救援ボランティア活動プロジェクト

3月11日の未曾有の大災害が発生してから、本学も「人になれ 奉仕せよ」の校訓のもと、如何にして被災した方々の救援活動を行うか模索してきました。大学が責任を持って行う活動である以上、被災地が真に求める活動であり、参加する学生にとっても教育的効果が期待できること。そして何よりも、学生の安全を第一に考えたものでなければなりません。

そのような考えから、5月以来、プロジェクトリーダーやスタッフが何度も現地に足を運び、検討を重ねてきました。またこの間、大学後援会、大学協業会を始め各関係機関のご協力をいただくことになり、教職員及び学生に参加を募ったところ、学生にいたっては募集定員を大きく上回る187名の応募があるなど、全学的な取り組みとして活動の準備が着々と進んでいきました。

そのような急な準備の下、8月2日の第1期グループが出発し、9月9日の第5期グループの帰着まで、各回4泊5日の日程で5回にわたりボランティア団が宮城県南三陸町に向かいました。

掲出されている写真は、津波で被災した土地の清掃活動です。一見、ゴミのように見えますが、そのすべては被災した方々の生活の跡なのです。実際に土を掘り起こしてみると、幸せそうな家族の写真、預金通帳、病院の診察券、ネックレス等々が続々と出てきました。参加した学生も、そこで片づけを行う意味をかみ締めながら黙々と真剣に作業を行いました。

その他、本学ボランティア団は仮設住宅集会所で子供たちとの交流を続けました。驚くほど元気な子供たちに逆に元気をもらいながら。しかし、この子供たちも大津波の目撃者なのです。何気ない一言に、はっとさせられることも何度かありました。一方、集会所は住民の方々の交流の場。「若い人とおしゃべりできるのが楽しい」といっていただきながら、年配の住民の方々と様々な交流を重ねることができました。

このボランティア活動は、被災地を救援することを目的にしていますが、結果としては学生のみならず参加教職員にとっても、多くの気づきの場、学びの場になりました。

自分は何者であるのか、自分の存在はどうあるべきか。そして、これからどのように生きるべきか。まさに「人になれ 奉仕せよ」を具現化するための場を提供いただいたような気がします。改めまして、そのような場を提供いただいた南三陸町の方々のご厚意に心より感謝申し上げます。

(関東学院大学)



東北ワークキャンプ

深い悲しみと混乱を東北にもたらした東日本大震災。中高では、7月30日から8月2日に生徒参加による東北ワークキャンプが行われました。参加者は、中学3年生以上の希望者で、22名の生徒（中学3年生7名、高校生15名）が参加しました。宮城県塩竈市にある塩釜キリスト教会を宿舎として使用させて頂き、七ヶ浜町で津波被害、災害ボランティアセンターの取り組みを学び、塩釜港から定期船で30分程の「桂島」でボランティア活動をさせて頂きました。参加者たちは、自分たちに何が出来るか戸惑いながらの参加でしたが、様々な困難の中にありながら一団を温かく迎えて下さった教会の方々に励まされ、力ももらい、真剣に桂島でのボランティア活動に取り組みました。桂島では打ち上げられたゴミで使用できない海水浴場の掃除と生きていくために海苔と牡蠣の養殖を遅れながらも再開している島の方々の作業を手伝いました。現地の人々との交わりと作業は、今の自分とこれからの自分を考える貴重な機会となりました。今回の東北ワークキャンプの活動は、大震災を前にしては、小さな事であり、まだ、スタート地点にすら立てていないかもしれません。しかし、イエス・キリストを土台とした校訓「人になれ 奉仕せよ」の中で歩む我々は、これからも、主イエス・キリストを土台とした人と人の交わりを大切に、その中で何が出来て、何を必要があるのか、神に祈りながら、考えていきたいと思えます。

(関東学院中学校高等学校)



被災地での奉仕活動

東日本を襲った大地震、大津波、原発事故による放射能漏れの大惨事、被災地の光景は一変しました。全国的な支援活動が展開される中、関東学院内の大学、各学校でも必要に応じたボランティア活動が実施されています。本校では夏休みを利用して、2つの団体がボランティア活動を実施しました。その一つの高校サッカー部は8月8日～14日、遠野市でも、もう一つのボランティア・キャンプは7月27日～30日に仙台市内の被災地域でボランティア活動を行いました。

田畑や住宅内での物品の分別作業や草取り、お祭りの手伝い、サッカーの親善試合、道路の側溝の泥だしなど、炎天下での汗だくの作業でしたが、参加した生徒たちの真摯に取り組む姿は敬服するほどでした。

「人になれ 奉仕せよ」の校訓を具現する一場面であったと思います。

(関東学院六浦中学校・高等学校)



ルワンダに贈った算数セット

ルワンダで働いています佐々木和之先生を通してピース・インターナショナルスクールに算数セットを送りました。

アフリカにあるルワンダでは1994年に、フツ族がツツ族を襲うという大きな民族紛争がありました。100日で80万人の方がなくなりました。紛争は終わったものの二つの部族に残した傷跡は今も尾を引いています。特に心の中に傷を持った人が多数います。佐々木和之先生は二つの部族が和解するために活動を行っています。また、先生は和解のための活動をしている REACH という団体に所属しています。今回、佐々木先生がルワンダで関わっていらっしゃる小学校、ピース・インターナショナルスクールで算数セットを子どもたちに使わせていたので送って欲しいとの話が先生からありました。

オリブの会（父母の会）が中心になり、在校生の保護者に声をかけ、使わなくなった算数セットを集めました。合計107セット送りました。

小学校から贈った算数セットで子どもたちの知識はもとより、和解のために使われますよう心から願っています。

(関東学院小学校)



タイ・ティワタ村への支援活動

タイの古都チェンマイから南西に300キロ。車で約6時間走った山岳地帯に少数民族のカレン族が住むチパレ地方があります。約40の集落が点在し、カレン語を話す人々が高床式住居で暮らしています。学校は中心部のティワタ村にしかありません。学校まで歩くと、近い子で4時間、遠い子は2日かかります。そのため多くの子ども達が学校に通えませんでした。1992年、カレン バプテスト コンベンションの牧師であるダウ先生が、ティワタ村に寮を建てました。寮費は一月100バーツ（約300円）です。28名の子どもたちがいましたが、寮費を払えない親が多くて運営できない状況になりました。1994年、チェンマイ在住の日本バプテスト同盟宣教師の大里英二先生（元関東学院六浦中高教諭）から連絡があり、支援活動が始まりました。

[2003年] 本校からの献金で女子寮が完成し「第1回タイ訪問団」として子供たちと保護者がティワタ村に行きました。

[2005年] 本校礼拝堂とチェンマイを電話回線で繋ぎ、同時生中継でクリスマス会を行いました。寮の子供たち十数名がティワタ村から来てくれました。またチェンマイにある「愛の家」（エイズの子供たちの収容施設）の子供たちも来てくれました。「きよしこの夜」の1節をタイの子供たちが日本語で歌い、2節を本校の子供たちがタイ語で歌い、3節はそれぞれの母国語で歌いました。

[2006年] 「関東学院サービスラーニングセンター」が建てられました。

[2009年] 創立125周年記念として、寮に車を寄贈しました。また創立記念式典に寮の生徒8名、ダウ牧師、ソムサク寮長、通訳のオップさんを招待しました。生徒たちは、ホームステイをしたり、海に遠足に行ったりして交流を深めました。

今年の8月「第10回タイ訪問団」が現地に行き、生活用品、薬、募金等を届けました。参加者は、児童1名と保護者、教員4名と卒業生2名でした。チェンマイでは、日本にきた子どもたちが出迎えてくれました。今回は途中の橋が大雨のために流されてしまい、山中を迂回して寮に行きました。

掲出されている写真は、関東学院六浦小学校の柿倉まゆみ先生がタイ・ティワタ村の子どもたちに墨で日本画を教えているところです。この後、子どもたちは日本画を描きました。

(関東学院六浦小学校)



幼稚園との交流

年長組の子ども達は、いわき市の平幼稚園のお友達と交流をしています。きっかけは、3月11日の大震災でした。六浦幼稚園の子ども達にとっても今までにない怖い経験に、動揺している姿が見られ、私達も初めは子ども達の不安を受け止めるだけで精一杯でした。でも、次第に怖い経験だけで終わるのではなく、「私達にも出来る事がないか」と考えるようになり、宣教師のロバート先生にその思いを伝えたとこ、困難な状況にある平幼稚園についてお話を伺いました。早速、「私達に出来る事はないかなあ」と子ども達に尋ねると、一番初めて出てきたのがお祈りです。その日から、平幼稚園のお友達の事が日々のお祈りに加わりました。そして平幼稚園のお友達に伝えたい事や、私達が出来る事を聞くと、「困ったことはない?」「離れていても一緒に遊ぼうね!」…子ども達の思いが次々と出てきます。どれも子ども達の思いが込められていて、私達も温かい気持ちになりました。話し合いを重ねた結果、手型を葉っぱに見立て「木」の手紙を送る事になり、皆で力を合わせて作成しました。数週間後、平幼稚園からお返事が届きました。一人ひとりの写真やメッセージ、福島で紹介されているお手紙に子ども達は興味津々。「ヤッター!お返事が来た」「又お手紙書こう」と大喜びでした。一度も会った事のないお友達ですが、具体的なやり取りは、距離を飛び越えて、すぐに身近な友達となりました。2学期になってからもビデオレターを送るなど交流が続いています。

この交流を通して、私達大人が沢山の事に気付かされました。幼くても、子ども達には他者を思いやる心と力が備わっている事を思わされました。お家の方からも嬉しいエピソードが寄せられました。「家でも、言われたからでなく自分から平幼稚園の事を祈っていました」「地震が起こった時に『平幼稚園の子ども達大丈夫かな?』と心配していました」等と、親御さん達も子ども達の優しい気持ちに触れて感動したそうです。

喜ぶものと共に喜び、悲しむものと共に悲しむ…他者を覚え、心を寄せる経験を積み重ねていく中で、奉仕する心の芽が育まれていく事を願い祈ります。そして、他者を大切に思う心の土台を培うためにも、一人ひとりが愛され大切にされた実感が持てるような保育を行っていききたいと思います。

(関東学院六浦幼稚園)



「人になれ 奉仕せよ」の土台づくり

4月より満1歳児・2歳児の「すずめ」クラスが出来ました。

満1歳の子ども達は歩くのもやっとですが、毎日のお散歩の積み重ねや階段の昇降で足腰もしっかりしてきました。お天気の良い秋晴れの日は近隣の緑道に出かけることが日課になっています。無条件に可愛がられ、許される存在として、まさに園のアイドル達と言えます。存在そのものが喜ばれ、愛されるすずめクラスの子ども達と関わることで、大きい子ども達はかつての自分に会おうのだと思います。

家族から愛され、大切にされる経験と同じく、家族以外の友達や先生との活動が人格の基礎を築きます。子どもが自分らしくなっていく、その土台作りがこの乳幼児期にはもっとも大切になります。校訓「人になれ 奉仕せよ」の土台といえましょう。種を植える前に畑の土を耕すのと同じように、神様から頂いた命を充分にいとおしむ必要があります。いけないことは宥めつつも、「かけがえのない無二のあなた」というメッセージは欠かせません。

私達保育者も、子どもを慈しんで保育にあたる中で、実は子ども達に「愛するとは」・「慈しむとは」・「大切にすることは」・「人に仕えるとは」・・・と教わっています。この相互関係の中に聖霊のはたらきがある、これが野庭幼稚園の優れているところといえます。

2012年4月より「認定こども園」として「のびのびのば幼稚園」と認可保育所「のびのびのば保育園」を運営することになっています。35年の幼稚園教育にプラスして、保育所の機能も備えた園となり、0歳児から関東学院の教育が受けられるようになります。人に仕えることに喜びを見いだせる、また、愛う人の傍らに寄り添える人に育ってほしい願いを込めて、私達は子ども達一人ひとりに仕えます。

(関東学院野庭幼稚園)

(見開き頁に掲載した写真とその説明文は、2011年10月12日から24日までフォーサイト21の1階エントランス・ロビーで学院史資料室が開催した、学院史資料展「建学の精神と『校訓』2011」の記録である。また同資料展は、同年12月16日、みなとみらい大ホールで開催された関東学院クリスマスコンサートの会場ロビーでも開かれた。)

学院史資料展2012 「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』」の教育



2012年度東日本大震災復興支援 ボランティアプロジェクト

2011年度に行われた、東日本大震災被災地救援ボランティアプロジェクトの活動に引き続き、今年度は復興支援をテーマにボランティア活動を行った。大震災の発生から1年半近くの時間が経過したが、被災地一帯ではいまだに元の平穏な生活を取り戻すには、まだまだはるかなる道程が必要というのが現状である。

確かに、大量の瓦礫は姿を消し、無残な姿をさらしていた建物の撤去も進んではいるが、いまだに多くの人々が仮の住処であるはずの仮設住宅で不自由な生活を送っている。そして、働き手が流出し、将来の展望がはっきりと見通せていない。そのような被災地で、真に必要な支援を行うこと。それを心がけて我々は現地に向かった。

ビニールハウスの復興支援をさせていただいた。津波により跡形もなくなったビニールハウスが、場所を変えて建て直されることになり、そのお手伝いを行った。炎天下の中での作業は大変であったし、すぐに出来上がるものではない。しかし、そのハウスはその後もずっと形を残し、私たちが待っていてくれる。そしてなによりも、これが、現地での産業復興の第一歩になるのだ。そのお手伝いをさせていただいた意義はとても大きい。

地域の除草作業も行った。今回は住民の皆さんとの共同作業になった。和気藹々と、いろいろなお話をしながら、丁寧に草刈を行った。この除草作業は、もともと地域恒例の共同作業であったが、この日私たちがお手伝いすることで、震災以来始めての地域の草刈になったとのことだ。私たちのお手伝いが、地域の絆を再び結びつける機会になったかもしれない。

また、仮設住宅の窓拭きは大変喜ばれた。「ありがとうね」「少し上がって、休んでって」「麦茶、冷えてるよ！」食事交流会ではひざを交えてお話をした。時には震災当日のお話を伺い、ともに涙し、時には若者同士の交流もあった。今回の活動は、三泊四日という短い時間であったが、昨年の活動に比べて遜色がないほど、大変充実した時間を過ごす事ができたと思う。そして、参加した学生一人ひとりが、「人になれ 奉仕せよ」の精神とは何かを感じ取り、これからの学生生活に大いに役立ててくれるものと信じている。

(関東学院大学)



東北地区への支援と交流

東日本大震災から1年6カ月。関東学院中学校高等学校では、復興への道りにある東北地区への支援と交流を多方面から続けています。その中で、7月26～27日、本校の陸上部の生徒20名(中3～高2)が宮城県仙台市を訪れました。1日目は尚綱学院中学校・高等学校(本校と同じキリスト教バプテスト派を土台としたキリスト教学校)の陸上部と合同練習会を行いました。その夜は、体育館に両校の部員が宿泊し、交流会などを行って交流を深めました。2日目は仙台市荒浜地区の津波で被害を受けた農地の瓦礫取りをお手伝いし、その後、震災慰霊碑の前で祈りを捧げました。参加した生徒からは、「地震や津波で多くのものが奪われ、悲しんでいる人がいる事を知り、日本中の人が東北の為にたとえ小さなことだとしても協力すべきだと改めて痛感させられた」「メディアではもう終わったかのように、何も報道されなくなったが、まだまだ自分の住んでいた地域に帰れない人の状況を知らされ、まだまだ終わっていないことがわかり、そのことを身の周りの人に伝えることが自分たちの役目だと思った」という声が多く聞かれました。これからも、神に祈りながら、校訓「人になれ 奉仕せよ」と向き合っていきたいと思えます。

(関東学院中学校高等学校)



ボランティア・キャンプ

日程 2012年8月3日(金)～8月6日(月)

場所 香川県小豆郡土庄町淵崎甲2071-22

日本バプテスト同盟 小豆島バプテスト教会

参加者 生徒7名(高校2年生男子2名、女子5名)、引率教員2名

今年度のボランティア・キャンプは、高校2年生7名の参加により、3泊4日、主に守られて、ボランティア活動を無事に終えることができ、まず神に感謝します。ボランティア活動の実施場所として、提供いただいた日本バプテスト同盟小豆島バプテスト教会の会員の方々、日本キリスト教団内海教会の荻野牧師の暖かいご配慮とご協力を得て、ボランティア活動を行うことができました。参加した生徒は、教会内の草取り、清掃、自炊を自主的に行い、日曜礼拝を通して、教会との親睦を深め、今後のボランティア活動に向けての学びの機会にもなったと思います。

本校の夏のボランティア活動は、東日本大震災の被災地での復幸(復興)支援ボランティアと、ボランティア・キャンプの2団体で実施しました。ボランティア・キャンプの方は1899年にビッケル宣教師が福音丸で、瀬戸内海の諸島を巡り、伝道活動をしたことに起源があります。1963年以降、約60年にわたり、継承されている、本校の大切な学校行事の一つです。

(関東学院六浦中学校・高等学校)



礼拝による奉仕

キリスト教では6月第2日曜日を「花の日（こどもの日）」としています。これは子供たちの信仰教育のために守った特別の礼拝に起源をもち、花を飾って礼拝を守り、その花を持って社会施設などを慰問するという習慣が教会の暦となって定着してきた日です。

関東学院小学校では毎年「花の日礼拝」を守っており、今年は6月8日（金）に全校で礼拝し、感謝と献身のしるしである献金をささげました。子どもたちだけではなく父母の会の花の会「エクレシア」の皆さんが礼拝のためにお花とカードを用意してくださいました。その日の昼休みと放課後、児童のキリスト教委員と教師で近隣の施設にお花とカードを届けました。

献金は、「佐々木和之さんを支援する会」（ルワンダの和解と平和のために）と「東日本大震災による被災生徒支援募金」（キリスト教学校教育同盟関東地区協議会を通じて）にささげました。

花や献金を神様が時になくなって用いてくださることを信じています。

（関東学院小学校）



タイ・ティワタ村への支援活動

タイの古都チェンマイから南西に300キロ。車で約6時間走った山岳地帯に少数民族のカレン族が住むチパレ地方があります。約40の集落が点在し、カレン語を話す人々が高床式住居で暮らしています。学校は中心部のティワタ村にしかありません。そのため多くの子ども達が学校に通えませんでした。

1992年、村の牧師であるダウ先生が、ティワタ村に寮を建てました。寮費は一ヶ月100バーツ（約300円）です。28名の子供たちがいましたが、寮費を払えない親が多くて運営できない状況になりました。

[1994年] 本校の支援活動が始まりました。

[2003年] 本校からの献金で女子寮が完成し「第1回タイ訪問団」として子供たちと保護者がティワタ村に行きました。

[2005年] 本校礼拝堂とチェンマイを電話回線で繋ぎ、同時生中継でクリスマス会を行いました。「きよしこの夜」の1節をタイの子供たちが日本語で歌い、2節を本校の子供たちがタイ語で歌い、3節はそれぞれの母国語で歌いました。

[2006年] 「関東学院サービスマーケティングセンター」が建てられました。

[2009年] 創立125周年記念として、寮に車を寄贈しました。また創立記念式典に寮の生徒8名、ダウ牧師、ソムサク寮長、通訳のオップさんを招待しました。

今年の8月「第11回タイ訪問団」が現地を訪問しました。参加者は、児童3名と保護者、中学生1名、教員2名と卒業生3名でした。今回も寮の子どもたちとの交流を深めることができました。

*写真は、「第11回タイ訪問団」（2012年8月17日～23日）

（関東学院六浦小学校）



小さな奉仕活動

子どもたちと大学生の環境サークル HEP とのスカベンジ（ゴミ拾い活動）は、数年前から始まりました。子どもたちにとって身近なよく遊ぶ公園を綺麗にすることは、解り易い環境に関わる奉仕活動になっています。当日、出会った学生さんと自己紹介をして小さなグループになり公園に出発です。子どもたちは、普段遊んでいる時には気付かないゴミが公園に沢山あることに驚き、学生さんと拾い集めながらそれぞれを分類していきます。最後に、拾い集めたゴミを皆で開んで環境について考えました。子どもたちから、「どうしてゴミを捨てるのだろう？」「皆の公園が汚れてしまうよね」「汚いと遊びたくなくなる」など様々な感想が出てきます。後日、親子遠足の帰りに皆でゴミ拾いをしますが、子どもたちが分類をしながらゴミを集めたり、なるべくゴミを出さないようにお家の方に声を掛けている姿が見られ、他の人のことを思いやる心の育ちを感じます。

（関東学院六浦幼稚園）



違いがもたらす豊かさ

4月より幼稚園・保育園の機能を併せ持つこども園として新たにスタートしました。

乳幼児の保育と教育を行うと共に、地域の子育て支援も合わせて行う施設です。現在は0歳児から6歳児まで、合計160名の園児が通園しています。親の就労に関わらず、全ての子ども達に開かれた園でありたいとの願いを体現化することが出来ました。

「のびのびのば園」ではキリスト教教育を基軸として、一人ひとりの子ども達が神様に愛され、人々に愛されて「のびのび」とその個性とその特質を十分に活かす保育を大切にしています。また、ダイバーシティの概念により、人権に配慮しています。人は皆その尊さにおいて平等だという考えです。全ての子ども達の貴さと存在価値の重さは平等ですが、子ども達は皆同じではありません。違うからこそ尊いのです。

「違うからこそ尊い」これは給食室とランチルームを完備し、完全給食にしたことにも繋がります。アレルギーの有無にかかわらず、美味しく安全で栄養価の高い食事を提供することが可能になりました。また、年少児（3歳児）からは自分でよそで食べているので、自分が食べられる量が決まるまでに成長してきています。あらゆる経験を通じて自分を知ることが出来る環境があります。

弱さや不得意があったとしても、自分のことが大好きでいられるように。そして、得意なことを通じて他者と協働し、平和を作りだすことに喜びを感じていられる人となるよう祈りを込めて保育にあたっています。

（関東学院のびのびのば園）

（見開き頁に掲載した写真とその説明文は、2012年10月17日から30日までフォーサイト21の1階エントランス・ロビーで学院史資料室が開催した、学院史資料展「建学の精神と『校訓』2012」の記録である。また同資料展は、同年12月17日、みなとみらい大ホールで開催された関東学院クリスマスコンサートの会場ロビーでも開かれた。）

「山麓通信」と「SCM」の経緯

(高商部第七回卒) 神谷量平

その経緯については、先んじて同名の著作があります。昭和十一年六月、昭森社刊の「山麓通信」で、著者は高畑棟材（以下敬称畧）です。私の中学生の頃の文筆の師でした。山岳と登山に関する月刊雑誌「山小屋」の編輯長で、当時のベストセラー「山を行く」（昭和五年六月、朋文堂刊）の著者でした。後に陣馬山麓に隠棲して、その風懐を吐露した随想集です。

その頃はまた、未だ自分の世界を山に向けたばかりであった詩人尾崎喜八にも屢々お目にかかり、どういふわけか私を属望されておりましたので、いつかは手許の聖書「マタイ伝」の第五章、いわゆる「山上の垂訓」をからめて著作の一つ書こうというのが、多分私の最初の夢であったろうと思います。私の山とキリスト教との最初の出会いで、私の「山麓通信」の由来です。

でもそれは、戦争で忽ち滅茶滅茶にされてしまいました。わが青春もろとも一片の完腐も無き壊滅でありました。

昭和十三年五月に補充兵召集されて麻布三連隊に入隊、八月に百三連隊に転属、ドンパチやりましたが、熱帯性マラリアから肺結核にかかり十年療養し、右肺は無きに等しくて、よくも九十八歳まで生きたものだと不思議でなりません。従って戦後平和が戻って来たのは既に三十一歳でしたが、あわてて劇作の勉強をしましたが、この仕事は残念ながら青春が必要でした。

それでも村山知義の指導のもとどうやら東京芸術座（元新協劇団）で、連続的に公演が出来ましたので、散文の世界に復帰、関東学院は卒業した高商部ではなく、神学部、社会事業部の先輩たち（富田富士雄、野海政一）及び中学部の恩師多田貞三先生の御指導を頂き、一九八三年九月一日「キリスト教社会主義研究会」の機関紙として、「山麓通信」第一号を創刊、一九九三年二月二十日百号まで十年続刊したのでした。

その「キリスト教社会主義研究会」は、それからのち関西のS・C・M（社会的-以前は学生-基督教運動研究会）に合流、「学生基督教運動史」（一九六二年二月、日本YMCA同盟出版部刊）の著者故中原賢次、同志社女子大学教授故武邦保、当時まだ御存命であった同学教授和田洋一、その他錚々たる先生方の御指導を頂きました。

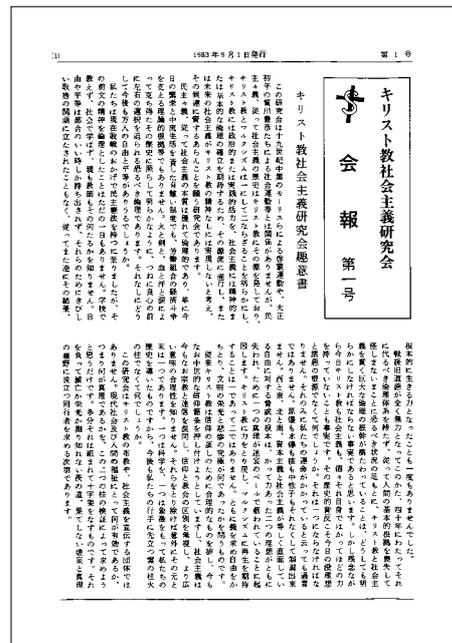
S・C・Mはそれ以前に発行人山北道彦で昭和五十年二月から昭和五十九年四月まで「SCM通信」を三十七号迄刊行されましたが一旦終刊、一九八六年七月十五日、「ムーブメント」として二〇〇四年十一月二十

三日まで七十三号を発行して休刊となっています。発行者は西川治郎で、一九三二年一月から七月まででしたが関東学院神学部の在校生でしたが、今日百三歳でなお御健在です。

思うのですが、私たちのSCMは関東と関西が共同して、キリスト教と社会のあるべき姿を模索した、極めて短期間な試みでしたが、今日殆ど知られていないのが残念です。その間また元関東学院々長小川圭治先生の「日本バルト協会」の社会性を屢々研究したことも誇りと思えますと共に、その御急逝を深くお悼み申し上げます。

「山麓通信」はそのほんの僅かな足がかりに過ぎませんでした。あの暗い戦争の時代であればこそ、キリスト教が人々の心に必須であったことを深く想起し、また社会主義の源泉であり修正であり、補強であることを銘記したいと思います。

「山麓通信」の第一頁に私が「以士帖生」の名で「巻頭言」を毎号書きました。以士帖は旧約聖書の「エステル書」からとりました。紀元前五世紀頃のペルシャ王室の話ですが、ヒトラー治下のドイツの「ホロー・コースト」に連なるユダヤ民族の苛酷な殺戮の歴史を想起することもさることながら、エステルはスターです。私の心の山の上に燦然と輝いていると思うのですが……。 (終)



▲1983年9月1日発行「山麓通信」(キリスト教社会主義研究会会報)第1号の1頁

『山麓通信』の紹介

元学院史資料室主幹 三浦啓治



▲神谷量平氏（昭和40年頃）
51歳頃の写真（神谷氏寄贈）



▲多田貞三先生（昭和8年2月）
44歳の写真（坂田記念館所蔵）

『山麓通信』は1983年9月に発足した「キリスト教社会主義研究会」の会報として創刊され、1993年2月発行の第100号をもって休刊になった。

『山麓通信』の主宰者である神谷量平は1928年に関東学院中学部に入学し、1936年に高等商業部を卒業した。戦後、劇作家、短歌作家として活躍され、多くの作品を残している。映画では、家城巳代治監督の『ともしび』、演劇では東京芸術座で上演された住井すえの『橋のない川』などが多数ある。また平和運動や核兵器廃絶の活動にも携わってこられた。現在は『京浜文学』の主筆として活動している。

キリスト教社会主義研究会は、キリスト教と社会のあるべき姿を模索し、地道な理論研究から始めた。学院の恩師である多田貞三の紹介で、戦前に日本YMCA 同盟学生部を中心にキリスト教の福音によって社会変革を志向した学生キリスト教運動（以下SCMと略）に関わった富田富士雄、野海政一等も参加した。さらに、戦前にYMCA 同盟学生部の主事でSCMを指導していた中原賢次や社会的キリスト教の研究者で同志社女子大学教授の武邦保などの参加があり、社会的キリスト教の検証とキリスト教の福音と現代社会の課題に対して多くの論文が発表された。

『山麓通信』は学院関係者の富田富士雄（元学院長）、野海政一（神学部卒）、多田貞三（教授）、相川高秋（大学長）、村田百可（元中学教師）、伊藤孝一（元職員）等の寄稿が多く、貴重な学院史の資料でもある。

神谷は坂田学院長、平和主義者で中学で英会話の教師のコベル、世界的な神道研究者のホルトム、宗教主任の中居京などの思い出を書いている。

1932年におきたSCMの活動をしていた多くの学生が検挙された事件について、当事者の富田と野海の記事がある。富田は、「SCMに走らせたものは昭和恐慌に現れたような深刻な社会的状況、それに対応して左右の激しい運動そして急激な戦時体制への全面的傾斜。」(30号)と、当時昭和恐慌による社会的な不安定状況で軍国主義化が進み、キリスト者としてこれに抵抗するためのやむにやまれぬ運動であったと証言している。野海も若松敏夫のペンネームでこの事件の発端から、学院の対応について『小説中江先生』(77号～83号)のなかで書いている。書名の「中江先生」は当時の宗教主任中居京であり、後に『小説中居先生』と題名を変え単行本として出版された。野海は他にキリスト教社会主義研究会から『「地の果てまで」を読む』という単行本も出版されている。この中には日本バプテスト神学校卒業生で、牧師の橋本宗範、橋本正三、また、学院長の坂田祐も詳しく紹介されている。また、SCM事件が起こった当時の神学部の予科である社会事業部の様子など描かれている。

神谷は恩師多田から、研究会のために多額の基金を提供され、また多田からの励ましの記事も多く、60年以上にわたる暖かい師弟関係が読み取れる。神谷は1991年に102歳で召天された恩師に、「追悼 多田貞三先生」(84号)と感謝の溢れる追悼の記事を書いている。



▲1993年2月20日発行「山麓通信」第100号の1頁

『キリスト教社会主義研究会会報』、『山麓通信』 総目次

関東学院学院史資料室 編

<凡例>

- ・仮名遣い等原文のままとした。
- ・関東学院に関する内容や人物について記載されている記事には、関東学院学院史資料室において★印を付加した。
- ・※印は適宜関東学院学院史資料室において付加した。「」(かぎ括弧)内は原文より一部抜粋し、括弧無しものは関東学院学院史資料室において記載した。

*誌名について、第1号から第14号までは『キリスト教社会主義研究会会報』、第15号から改題し『山麓通信』となった。

第1号 1983(昭和58)年9月1日発行	
キリスト教社会主義研究会趣意書	神谷量平 1
キリスト教社会主義の歴史	神谷量平 2
何故今キリスト教社会主義か	神谷量平 4
トビックス へそまがり平和論(一)	神谷量平 5
短歌 創世記	以士帖生 7
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
会報	— 8
編集後記	神谷量平 8
第2号 1983(昭和58)年10月15日発行	
三つの研究会スタート	神谷量平 1
何故私はキリスト教社会主義か	神谷量平★ 2
落穂東 明暗問答	神谷量平 3
トビックス 反対の季節	へそまがり平和論(二) 神谷量平 4
嘉音芳信(二)※1	—★ 5
随想 私とアイコン	以士帖生★ 6
嘉音芳信(二)	—★ 7
編集後記	K生 8

※1 正しくは(一)	
第3号 1983(昭和58)年11月20日発行	
会の目的・研究・名称について	神谷量平 1
特別寄稿・特集	多田貞三 2
特別寄稿・特集	長尾正良 3
トビックス 恐ろしい平和	へそまがり平和論(三) 神谷量平 4
随想 最初の祈禱	以士帖生★ 6
嘉音芳信	—★ 7
会報	— 8
編集後記	K 8
第4号 1983(昭和58)年12月15日発行	
研究報告(1) 聖書と歴史の通観	聖書を再読する会 1
研究報告(2) 人間の世紀(前書きとして)	フォイエールバッハの会 2
落穂東 タクロン・チャーバー先生百年忌	自由民権へ遡る会 3
トビックス つむじ曲がり教育論(一)	神谷量平 4
随想 霞ヶ丘テオゴニア(一)	以士帖生★ 6
嘉音芳信	— 8
新賛助会員紹介	— 8
編集後記	K 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第5号 1984(昭和59)年2月5日発行	
研究報告(1) 荒野の七人	聖書を再読する会 1
研究報告(2) より高い段階とは何か	フォイエールバッハの会 2
予告 アンソロジー「反核・平和かながわの声」第四集	— 3
トビックス 道德教育とホルトム先生	つむじ曲がり教育論(二) 神谷量平★ 4
嘉音芳信(一)	— 5
随想 校訓考	以士帖生★ 6
嘉音芳信(二)	—★ 7

新賛助会員紹介	— 8
御献金御礼	— 8
編集後記	K 8
(前号訂正)	— 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第6号 1984(昭和59)年3月15日発行	
とりまとめて、もう一度……キリスト教	社会主義の立場とは何か? 神谷量平 1
研究報告 自由民権の風土	自由民権へ遡る会 2
トビックス 解放区烏村 つむじ曲がり	教育論(三) 神谷量平 4
原稿募集	— 5
随想 チャペルと教室	以士帖生★ 6
会員募集	— 7
嘉音芳信	— 8
新賛助会員紹介	— 8
編集後記	K 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第7号 1984(昭和59)年4月25日発行	
研究報告(1) 存在するもの	聖書を再読する会 1
研究報告(2) 甘美なる古典	フォイエールバッハの会 2
研究報告(3) ロマン主義的金目川	自由民権へ遡る会 4
(前号訂正)	— 5
予告	— 5
随想 黄塵の下	以士帖生★ 6
近況 新短歌誌「火の群れ」第三十五号	発行 7
嘉音芳信	— 8
新賛助会員紹介	— 8
編集後記	K 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第8号 1984(昭和59)年5月15日発行	
合同研究報告(一) 平和運動に欠けているもの	神谷量平 1
提起(一) 北村透谷の正と邪	佐藤富美雄 3
往復 中原賢次様と神谷量平間の三信	— 4
もうすぐに	むらぎも 4
随想 介石と清松	以士帖生★ 6
嘉音芳信	— 7
編集後記	K 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第9号 1984(昭和59)年6月25日発行	
主張 素材と創造	神谷量平 1
合同研究報告(2) キリスト教社会主義とS・C・M	神谷量平 2
「ヒロシマのモヒカン族」	神谷量平 3
随想 一九二八年	以士帖生★ 4
語り継がれなかった抗議	K 5
トビックス ラロック提督遠征記	神谷量平 6
嘉音芳信	— 7
会報	— 8
編集後記	神谷量平 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第10号 1984(昭和59)年7月20日発行	
研究報告(1) 東と西、宗教と社会	

聖書を再読する会	1
研究報告(2) 科学から空想へ	フォイエールバッハの会 2
研究報告(3) 逃げて来たキリスト教(一)	自由民権へ遡る会 3
トビックス 「林檎園日記」 怒み節	K生 4
嘉音芳信	— 5
小池常作様への回答	K 5
随想 悪友伝	以士帖生★ 6
嘉音芳信	— 7
編集後記	K 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第11号※1 1984(昭和59)年8月15日発行	
戯曲 「ヒロシマ」のホタル(一幕)	神谷量平 1
会報	— 10
編集後記	K生 10
キリスト教社会主義研究会々則	— 10

※1 「一周年記念平和月刊特別号」	
第12号 1984(昭和59)年9月25日発行	
主張 「民主主義の倫理と社会主義の精神」-思想の大衆化は可能か?-	神谷量平 1
研究報告(1) 科学から空想へ(二)	拡散するリアリズムへの対策
	フォイエールバッハの会 3
研究報告(2) 逃げて来たキリスト教(二) 知性の時代への警告	自由民権へ遡る会 4
嘉音芳信(一) 「ヒロシマのホタル」批評集	— 5
随想 「小説関東学院」	以士帖生★ 6
嘉音芳信(二)	— 8
編集後記	K生 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第13号 1984(昭和59)年10月25日発行	
主張 登山とキリスト教社会主義-Mさんへの手紙	神谷量平 1
私的報告 イエスの教えのドラマ「沈黙の敵」創作にあたって	K生 3
落穂東 日本無学党宣言	神谷量平 5
随想 ウンテルム・ラート	以士帖生★ 6
会報	— 8
編集後記	K生★ 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第14号 1984(昭和59)年11月20日発行	
主張 知られざるキリスト教 全く異質となつた原初世界の喪失	神谷量平 1
合同研究報告 反省と展望 民間学としての総合のために 三つの研究会から	3
落穂東 私のリバイバル	— 4
トビックス 共創協定は死文か?	神谷量平 5
随想 横浜バンスキング	以士帖生★ 6
編集後記	K 8
キリスト教社会主義研究会々則	— 8
第15号 1985(昭和60)年1月25日発行	
謹告※1	神谷量平 1
「私のリバイバル」氏に訊す T・T生	2
随想 キリスト教における父子宗教の起	

源 現在の父親不在現象の意味について	R・K生	3
トピックス 私服「東京宣言」のために	タケル生	5
小説 原罪 (一)	以士帖生	7

※1 改題について

第16号 1985 (昭和60) 年2月25日発行		
小さい青い野の花	神谷量平	1
研究報告(1) 光と闇・有と無		
	聖書を再読する会	2
落穂東 続・私のリバイバル	R・K生	3
私的報告 「沈黙の敵」千里の中ば	神谷量平	4
小説 原罪 (二)	以士帖生	6
会報	—	8
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第17号 1985 (昭和60) 年4月15日発行		
来りて去れ、去りて来れ	神谷量平	1
詭弁、疏弁、強弁-T先生へ 一付、 全体の不明確な点について	R・K生	2
キリスト教社会主義入門 (一) ※1		
	八十野健	4
原罪 (三)	以士帖生	6
編集後記	K	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「第一章 心身の自由」

第18号 1985 (昭和60) 年5月15日発行		
望岳人・木暮理太郎	神谷量平	1
民衆宗教としてのキリスト教-イエスの 教え、の階段としての原始宗教の形態、 その今日的意味	村狩萌子	2
キリスト教社会主義入門 (二) ※1		
	八十野健	4
小説 原罪 (完)	以士帖生	6
編集後記	K	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「第二章 心とは何か」

第19号 1985 (昭和60) 年6月20日発行		
天の入江	神谷量平	1
フォイエールパッハの不明点 大江満雄様 に問う フォイエールパッハの会		2
キリスト教社会主義入門 (三) ※1		
	八十野健	4
綴方教室 (老人版) 街角にて	村狩萌	6
思うつば	草根不死男	6
「原罪」後記	以士帖生	7
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「第三章 心の動きと歴史」

第20号 1985 (昭和60) 年7月15日発行		
神苑・その五十年	以士帖生	1
SCM五十五年と私	神谷量平★	2

第21号 ※1 1985 (昭和60) 年8月10日発行		
反核アッピール構成劇台本 核兵器を裁 く国民法廷 ヒロシマ・ナガサキの再現を 企む日本政府を糾弾する	神谷量平	1
編集後記	R	10
キリスト教社会主義研究会々則	—	10

※1 「平和月間、二周年記念特別号」

第22号 1985 (昭和60) 年9月15日発行		
三年目の趣意書	神谷量平	1
キャンドルを灯す (エスベラント詩)		
	ポール・トルセン、小池常作訳	2
キリスト教社会主義入門 (四) ※1		
	八十野健★	2
お言葉		
	ジャック・プレヴェール、草根不死男訳	4

無題 ※2		
	ジェニー・クレアー・アダムス★	5
トピックス 神風は戦争が終わってから吹 いた	草根不死男	6
会員募集	—	8
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「第四章 心・魂い・霊」
※2 「註」は神谷量平

第23号 1985 (昭和60) 年10月20日発行		
ヤナギラン	以士帖生	1
「部落」と世界性-キリスト教の展開-		
	草根不死男	2
キリスト教社会主義入門 (五) ※1		
	八十野健★	4
社会主義散歩 ルポルタージュ「川崎 港」	神谷量平	6
嘉信芳信	—	8
編集後記	R・K	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「第五章 心の周辺」

第24号 1985 (昭和60) 年11月15日発行		
耶蘇教	神谷量平	1
イエスの福音 キリスト教の展開 (2)		
	草根不死男	2
キリスト教社会主義入門 (六) ※1		
	八十野健	4
トピックス 「テンノさんに殺された」	以士帖生	6
消息	—	8
編集後記	R・K	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「第六章 心の向上」

第25号 1986 (昭和61) 年1月20日発行		
クリスマスと正月	草根不死男	1
大逆転 耶蘇教普遍化のために		
	八十野健	2
報告 SCM京都大会に参加して		
	神谷量平	4
コベル先生 (上) 霞ヶ丘テオゴニア (三)	以士帖生★	6
編集後記	K	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第26号 1986 (昭和61) 年3月10日発行		
思いのたけ (走り書き的覚え書)		
	神谷量平	1
宗教と反宗教 続・耶蘇教普遍化のために		
	八十野健	2
わたしの始末書 続・SCM京都大会に 参加して	神谷量平	4
会員募集	—	5
コベル先生 (下) 霞ヶ丘テオゴニア (三)	以士帖生★	6
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第27号 1986 (昭和61) 年4月25日発行		
人に忍びざるの政	中原賢次	1
執筆者紹介・中原賢次先生	神谷量平	3
小説 懐中時計 座間成雄君のこと		
	若松敏夫★	4
執筆者紹介・若松敏夫さん	以士帖生	9
編集後記	R	10
予告 ※1	—	10
キリスト教社会主義研究会々則	—	10

※1 「『SCM通信』第38号 (復刊号) が五月に発行さ
れます」

第28号 1986 (昭和61) 年5月25日発行		
その一日 渋谷・東京山手教会にて		
	神谷量平	1
小説 懐中時計 承前 座間成雄君のこと		
	若松敏夫★	2

第29号 1986 (昭和61) 年6月25日発行		
ボラントピア	以士帖生★	1
小説 懐中時計 完 座間成雄君のこと		
	若松敏夫★	2

第30号 ※1 1986 (昭和61) 年7月31日発行		
社会思想の源泉	中原賢次	1
キリスト教社会主義研究会報 「山麓通 信」第三〇号発刊を祝して 多田貞三★	—	5
小説「懐中時計」メール合評	—	6
落穂東 時間外門前問答 (ルカ伝一三- 二五)	以士帖生	6
会報・消息	—	8
編集後記	K	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「記念号」

第31号 ※1 1986 (昭和61) 年8月31日発行		
「わかった!」 (一)	以士帖生	1
祝30号・3周年記念「嘉音芳信」集		
	—	2
編集雑記	K	2
戯曲 ヒロシマの流灯 (一幕)		
	神谷量平	4

※1 「三周年号」

第32号 1986 (昭和61) 年9月30日発行		
「わかった!」 (二)	以士帖生	1
ジョン・ラスキン 「社会思想の源泉」 で思い出したこと	神谷量平	2
ノイの話 (対米ベトコン戦記)		
	アン・デュツ、訳 青山伊勢	3

第33号 1986 (昭和61) 年10月25日発行		
社会的基督教と私	相川高秋	1
警世と受難の伝統、その高揚と普及 - 西の「ムーブメント」東の「山麓」-		
	以士帖生	2
ノイの話 (対米ベトコン戦記) 承前		
	アン・デュツ、訳 青山伊勢	3
編集後記	R	8

第34号 1986 (昭和61) 年11月20日発行		
キリスト教の内外	以士帖生	1
嘉音芳信抄 今、私が考えていること (一)	伊藤孝一	2
「ヒロシマの流灯」よ灯れ	小池常作	3
俳句-短歌-詩劇	増田重郎	3
新刊紹介 トマス・カーライル、多田貞 三訳 追想 ジェーン・ウェルシ・カー ライル	R	4
報告 「耕して天に到る」 SCM研究会 の二日間	神谷量平	5

第35号 1987 (昭和62) 年1月20日発行		
安政条約と安保条約 (一)	以士帖生	1
今、私が考えていること (二) -人 間・社会的動物-	伊藤孝一	2
わたしが来たのは (一) -イエスの自 覚的使命の告示-	中原賢次	5
会報という名の編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第36号 1987 (昭和62) 年2月20日発行		
安政条約と安保条約 (二)	以士帖生	1
今、私が考えていること (三) -人 間・社会的動物-	伊藤孝一	2
わたしが来たのは (二) -イエスの自 覚的使命の告示-	中原賢次	5
編集後記	R	8

第37号 1987 (昭和62) 年3月20日発行		
今、私が考えていること (四) -人 間・社会的動物 (続) -	伊藤孝一	1
わたしが来たのは (三) -イエスの自 覚的使命の告示-	中原賢次	5
編集後記	R	8

第38号 1987 (昭和62) 年 4月20日発行
今、私が考えていること (五) -人
間・欲に手足のついた者-

伊藤孝一 1
野海政一 2
「解説」と「展望」 R★ 4
わたしが来たのは (四) -イエスの自
覚的使命感の告示- 中原賢次 5
会報 R 8
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第39号 1987 (昭和62) 年 5月25日発行
安政条約と安保条約 (三) 以士帖生 1
今、私が考えていること (六) -人
間・欲に手足のついた者- 伊藤孝一 2
唯物弁証法的祈禱例 至乃山人 4
わたしが来たのは (五) -イエスの自
覚的使命感の告示- 中原賢次 5
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第40号 1987 (昭和62) 年 6月20日発行
今、私が考えていること (七) -人
間・応答的存在- 伊藤孝一 1
わたしが来たのは (六) -イエスの自
覚的使命感の告示- 中原賢次 5
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第41号 1987 (昭和62) 年 7月20日発行
今、私が考えていること (八) -人
間・応答的存在- 伊藤孝一 1
INTERMEZZO R 5
わたしが来たのは (七) -イエスの自
覚的使命感の告示- 中原賢次 6

第42号 1987 (昭和62) 年 8月25日発行
今、私が考えていること (九) -人
間・応答的存在- 伊藤孝一 1
MOVEMENT 第五号発刊 (SCM通信
改題) - 3
わたしが来たのは (八) -イエスの自
覚的使命感の告示- 中原賢次 4
胸打つ和歌一首 若松敏夫★ 7

第43号 1987 (昭和62) 年 9月20日発行
今、私が考えていること (一〇) -人
間・応答的存在- 伊藤孝一 1
わが名はノイ (一) 武田好一 4
わたしが来たのは (九) -イエスの自
覚的使命感の告示- 中原賢次 5
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第44号 1987 (昭和62) 年10月20日発行
今、私が考えていること (十一) -人
間・応答的存在- 伊藤孝一 1
わが名はノイ (続) 武田好一 4
告知板 SCMの「つどい」 SCM研究会 4
わたしが来たのは (一〇) -イエスの
自覚的使命感の告示- 中原賢次 5
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第45号 1987 (昭和62) 年11月20日発行
昭和六十二年九月十八日 以士帖生 1
今、私が考えていること (完) -人
間・応答的存在- 伊藤孝一 2
二つの論文の接点 -考えていることと
来たのは- 神谷量平 4
会報 - 8
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第46号 1988 (昭和63) 年 1月20日発行
ケンカ伝道 以士帖生 1
現代社会の悲劇 (一) -いかに生くべ
きか- 伊藤孝一 2
税と原発と 武田好一 4
博多・大牟田 神谷量平 4
人の救い・世の救い (一) 中原賢次 6

編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第47号 1988 (昭和63) 年 2月20日発行
続・ケンカ伝道 以士帖生 1
現代社会の悲劇 (二) -いかに生くべ
きか- 伊藤孝一 2
税と原発と 真実を明示し訴える
武田好一 4
大牟田・博多 神谷量平 4
人の救い・世の救い (二) 中原賢次 6
編集後記 R 8
会員募集 - 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第48号 1988 (昭和63) 年 3月20日発行
続々ケンカ伝道 以士帖生 1
現代社会の悲劇 (三) -いかに生くべ
きか- 伊藤孝一 2
多田貞三著「誠一心-わたしの信仰告
白」 - 3
税と原発と (三) 武田好一 4
神無図記 (一) -天皇の軍隊- 神谷量平 4
相川高秋著「わが恵み汝に足れり」 - 5
人の救い・世の救い (三) 中原賢次 6
会報*1 - 8
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

※1 「賛助会員多田貞三先生白寿記念祝会」

第49号 1988 (昭和63) 年 4月20日発行
狂歌一束 以士帖生 1
現代社会の悲劇 (四) -いかに生くべ
きか- 伊藤孝一 2
税と原発と (四) 武田好一 4
神無図記 (二) -東洋鬼子伝- 神谷量平 4
人の救い・世の救い (四) 中原賢次 6
会報 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第50号 1988 (昭和63) 年 5月20日発行
歴史の命令 以士帖生 1
現代社会の悲劇 (五) -いかに生くべ
きか- 伊藤孝一 2
神無図記 (三) -挿図省略- 神谷量平 4
人の救い・世の救い (五) 中原賢次 6
会報*1 R★ 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

※1 「今年満九十九歳の多田貞三先生白寿記念祝会」

第51号 1988 (昭和63) 年 6月20日発行
世直し・人直し・時直し 以士帖生 1
「わが恵み汝に足れり」のために (上)
-相川高秋先生のこと- 若松敏夫★ 2
税と原発と (五) 武田好一 4
神無図記 (四) -「細雪」の頃- 神谷量平 4
人の救い・世の救い (六) 中原賢次 6
会報*1 神谷★ 8
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

※1 「前号既報の多田先生白寿記念祝会横浜会場は、五月七日午後二時からホテルリッチ横濱の五階青海の間で開催され、長老高谷道男先生を含めた旧先生をはじめ関東学院、同英語学校、捜真女学校、横浜バプテスト教会関係の有志一六〇名が参集」

第52号 1988 (昭和63) 年 7月20日発行
声なき「声」 以士帖生 1
「わが恵み汝に足れり」のために (下)
-相川高秋先生のこと- 若松敏夫★ 2
神無図記 (完) -立派な兵隊- 神谷量平 4
編集後記 R 5

人の救い・世の救い (七) 中原賢次 6
会報 R★ 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第53号 1988 (昭和63) 年 8月20日発行
闇の中 神谷量平 1
ヒロシマの蟬 (一幕) 江須光生 2
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第54号 1988 (昭和63) 年 9月20日発行
六年目の「山麓」 以士帖生 1
山の彼方 -戦争体験の変遷- 神谷量平 2

おゆうさん
マリア・マグダレナ・木暮美枝子 4
編集後記 R 8
近刊 天恩九十九年の賀 -多田貞三先
生白寿記念祝会の記録 - 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第55号 1988 (昭和63) 年10月20日発行
それから 以士帖生 1
ア・パラグラフ 愁葉録 神谷量平 2
詩 二つ*1
マリア・マグダレナ・木暮美枝子 4
高橋喜惣勝の思い出 (上) 若松敏夫 6
会報 R
・「天恩・九十九年の賀-多田貞三先生
白寿記念祝会の記録」発行に寄せて・本
年度「SCMの集い」その他 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

※1 「こころ」「ろうそく」

第56号 1988 (昭和63) 年11月20日発行
我の外何物をも神とすべからず 以士帖生 1
高橋喜惣勝の思い出 (中) 若松敏夫 2
税と原発と (六) 武田好一 4
報告 教えて下さい -SCMのつどい
から- 神谷量平 4
編集後記 R 8

第57号 1989 (平成元) 年 1月20日発行
私の神と三位一体 以士帖生 1
眼処に開け 中原賢次 2
税と原発と (七) 武田好一 4
高橋喜惣勝の思い出 (下) 若松敏夫 5
会報 -★ 7
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第58号 1989 (平成元) 年 2月20日発行
水車の弁証法 以士帖生 1
否定・媒介論について -武先生・神谷
主筆に感謝- 中原賢次 2
信毎歌壇入選 近詠八首 新納惇夫 4
無道徳の系譜 (上) 今井二領 4
あ・ばらぐらふ 続愁葉録 神谷量平 6
会報 R 8
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第59号 1989 (平成元) 年 3月20日発行
わたされた歴史 以士帖生 1
イエスの宗教革新運動 (一) -ユダヤ
教の社会化- 中原賢次 2
中原先生のお便りから R 4
無道徳の系譜 (中) 今井二領 5
キリスト教社会主義の前提 -それは私
にとって何なのか- 神谷量平 6
山麓・詩歌句 (文芸欄) - 8
編集後記 R 8
キリスト教社会主義研究会々則 - 8

第60号 1989 (平成元) 年 4月20日発行
続 水車の弁証法 以士帖生 1
イエスの宗教革新運動 (二) 中原賢次 2
中原賢次先生への手紙 -「S・C・M」

の目標と課題 - (1)	武邦保	4
新しい読者に	R	5
無道徳の系譜 (下)	今井二領	6
復活祭 (前編)	新納淳夫	7
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第61号 1989 (平成元) 年 5月20日発行		
続・わたされた歴史	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (三)	-ユダヤ	
教の社会化-	中原賢次	2
キリスト教社会主義の復活 -S・C・M		
のつながり-	神谷量平	4
復活祭 (後編)	新納淳夫	6
中原賢次先生著作集	—	7
会報	—★	8
編集後記	—	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第62号 1989 (平成元) 年 6月20日発行		
パーベル・チャターヴァイゼ	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (四)		
	中原賢次	2
MOVEMENT第12号 (SCM研究会発行)		
内容	—	4
キリスト教社会主義の路線 -SCMと		
のつながり-	神谷量平	4
小説 見神の記 (一)	小野正三	6
編集後記	R, O	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第63号 1989 (平成元) 年 7月20日発行		
病院の死	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (五)	-ユダヤ	
教の社会化-	中原賢次	2
キリスト教社会主義の現実 -SCMと		
のつながり-	神谷量平	4
小説 見神の記 (二)	小野正三	6
編集後記	—	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第64号 1989 (平成元) 年 8月20日発行		
二〇〇年と三〇〇年	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (六)		
	中原賢次	2
琵琶歌 ナガサキのペトロ	神谷孤村	4
小説 見神の記 (三)	小野正三	6
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第65号 1989 (平成元) 年 9月20日発行		
尾瀬の思い出	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (七)	-ユダヤ	
教の社会化-	中原賢次	2
玄海灘を渡った手紙	新納淳夫	4
税と原発と (七) ※1	武田好一	5
会報	—★	5
あえて独断と偏見を -SCM「東京の		
集い」のために-	神谷量平	6
リバイバル SCM信仰復興のために		
-'89年東京のつどい-	—	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 正しくは (八) か?

第66号 1989 (平成元) 年10月20日発行		
先祖たち (上)	以士帖生	1
主張 SCMはどうあるべきか? -		
カール・バルトを超えて-	R	2
イエスの宗教革新運動 (八)		
	中原賢次	4
その後の「私の街から戦争が見えた」		
	神谷量平	6
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第67号 1989 (平成元) 年11月20日発行		
先祖たち (中)	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (九)		
	中原賢次	2
会報	—	3

SCM東京の集い・報告 -第三宗教改		
革を目指して-	神谷量平	4
小説 見神の記 (四)	小野正三	6
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第68号 1990 (平成2) 年 1月20日発行		
先祖たち (下)	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (十)		
	中原賢次	2
モラトリアム信仰者の弁	神谷量平	4
川井清一郎訓導事件	新納淳夫	6
会報	—	8
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第69号 1990 (平成2) 年 2月20日発行		
京浜の虹	以士帖生	1
イエスの宗教革新運動 (十一)		
	中原賢次	2
福音の社会化 -中原賢次先生の「イエ		
スの宗教革新運動 (十)」を読みと-		
	武邦保	3
長崎市長への手紙	佐藤岩子	5
会報	R	7
紹介 村田大造著作集 全十四巻	R	7
編集後記	R	8
広告 京浜現代戯曲集 神谷量平、梨地		
四郎	—	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第70号※1 1990 (平成2) 年 3月20日発行		
酔いどれ聖譚	以士帖生	1
福音の社会化 -『イエスの社会的立		
場』について-	武邦保	2
税と原発と (八) ※2	武田好一	4
祝70号 会員・会友通信・その他	—	5
特報!!	R	6
編集雑記	R	6
合理的な、うえにも合理的な……		
-附・第七〇号発行に際して-		
	神谷量平	7
広告 京浜現代戯曲集 神谷量平、梨地		
四郎	—	10
キリスト教社会主義研究会々則	—	10

※1 「記念号」

※2 正しくは (九) か?

第71号 1990 (平成2) 年 4月20日発行		
親方は「日の丸」か	以士帖生	1
福音の社会化 (三) -信仰の非イデオ		
ロギー化について-	武邦保	2
映街劇区	神谷量平	4
小説 見神の記 (五)	小野正三	6
会報※1	R	8
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「一九九〇年版「キリスト教年鑑」が三月二六日に発行されました。弊会も、SCM研究会も収録されています。」

第72号 1990 (平成2) 年 5月20日発行		
西光万吉の思い出	以士帖生	1
福音の社会化	武邦保	2
神の国建設への階段 (1)	栗原治人	4
一会員から	匿名希望	5
小説 見神の記 (六)	小野正三	6
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第73号 1990 (平成2) 年 6月20日発行		
七十年の夢	以士帖生	1
アピール 再びキリスト教社会主義と		
は何か?	S・K生	2
入会のすすめ キリスト教社会主義研究		
会の道	Y・W生	3
若い人々へのメッセージ -「平和の		
集い」の高校生諸君に-	神谷量平	4
小説 見神の記 (七)	小野正三	6

編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第74号 1990 (平成2) 年 7月20日発行		
玉葱の皮	以士帖生	1
イエスの神の国共同体 -その原点をさ		
ぐる-	武邦保	2
税と原発と (終)	武田好一	4
大嘗祭反対諸君への苦言	神谷量平	4
架空寄稿 言論「植山節考」		
	深沢七郎	5
小説 見神の記 (八)	小野正三	6
会報	—	8
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第75号 1990 (平成2) 年 8月20日発行		
父の生れた場所	以士帖生	1
平和の「福音」	武邦保	2
瀬河の藻屑 <S 憲兵軍曹> (一)		
	安藤皓美	4
わかりやすい話 (一)	神谷量平	6
会報※1	—	7
編集後記	R	8
会報 (続)	—	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8
八月六日の「私報」!! ※2	神谷量平	—

※1 「近刊予告 神谷量平 歌集 自分史々々 キリスト教社会主義研究会刊」

※2 「号外」

第76号 1990 (平成2) 年 9月20日発行		
上高地今昔	以士帖生	1
SCM研究会の集いについて	R	2
お知らせ '90年度「SCMの集い」と「記		
念講演会」	—	3
瀬河の藻屑 <S 憲兵軍曹> (二)		
	安藤皓美	4
わかりやすい話 (二)	神谷量平	7
会報	—	8
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第77号 1990 (平成2) 年11月20日発行		
聖書の中の分水嶺 (一)	以士帖生	1
わかりやすい話 (三)	神谷量平	2
「神の国」の社会学 (その一) 武邦保		4
小説 中江先生 (一)	若松敏夫★	6
おわび (会報にかえて)	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第78号 1991 (平成3) 年 1月20日発行		
聖書の中の分水嶺 (二)	以士帖生	1
「神の国」の社会学 (その二) 武邦保		2
歌集「自分史史料」を出して		
	神谷量平	4
小説 中江先生 (二)	若松敏夫★	6
会報	R	8
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第79号 1991 (平成3) 年 2月20日発行		
聖書の中の分水嶺 (三)	以士帖生	1
「神の国」の社会学 (その三) 武邦保		2
-歌集「史料」の御感想集-	—	4
小説 中江先生 (三)	若松敏夫★	6
編集後記	R	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第80号※1 1991 (平成3) 年 3月20日発行		
聖書の中の分水嶺 (四)	以士帖生	1
「神の国」の社会学 (その四) 武邦保		2
基本喪失者の群れ (一)	神谷量平	4
編集雑記	R	5
歌集「自分史史料」の読後感		
	後藤順一郎	6

小説 中江先生 (二) ※2	若松敏夫★	8
S・C・Mから	R	10
キリスト教社会主義研究会々則	—	10

※1 「記念号」

※2 正しくは(四)

第81号 1991(平成3)年4月20日発行	
聖書の中の分水嶺(五) 以士帖生	1
「神の国」の社会学(その五) 武邦保	2
基本喪失者の群れ(二) 神谷量平	4
小説 中江先生(五) 若松敏夫★	6
編集後記 R	8
キリスト教社会主義研究会々則	8

第82号 1991(平成3)年5月20日発行	
聖書の中の分水嶺(六) 以士帖生	1
「神の国」の社会学(その六) 武邦保	2
まず常識から始めよう 新居輝	4
小説 中江先生(六) 若松敏夫★	6
編集後記 R	8
キリスト教社会主義研究会々則	8

第83号 1991(平成3)年6月20日発行	
聖書の中の分水嶺(七) 以士帖生	1
「神の国」の社会学(その七) 武邦保	2
続・まず常識から始めよう 新居輝	4
小説 中江先生(七) 若松敏夫	6
会報	8
編集後記 R	8

第84号※1 1991(平成3)年8月20日発行	
聖書の中の分水嶺(八) 以士帖生	1
「神の国」の社会学(その八) 武邦保	2
キリスト教界喫緊の重要事 -市民の立場から-	4
ハルビン詠草 新納淳夫	6
大連市終戦詠草 新納淳夫	7
ヒロシマ・ナガサキへのメッセージ -忘れられた核心-	8
キリスト教社会主義研究会	8
追悼 多田貞三先生(102.8歳) R★	9
会報	10
編集後記 R	10
キリスト教社会主義研究会々則	10

※1 「平和記念号」

第85号 1991(平成3)年9月20日発行	
聖書の中の分水嶺(九) 以士帖生	1
「神の国」の社会学(その九) 武邦保	2
科学から空想へ -神谷短歌のある読みかた-	4
葛城峻	4
偶感 武田好一	7
会報 R	8
編集後記 R	8

第86号 1991(平成3)年10月20日発行	
聖書の中の分水嶺(完) 以士帖生	1
「神の国」の社会学(その十) 武邦保	2
一括提出します 神谷量平	4
続 ヒロシマ・ナガサキへのメッセージ	6
会報	8
編集後記 R	8
キリスト教社会主義研究会々則	8

第87号 1991(平成3)年11月20日発行	
ほのほ 以士帖生	1
独立傳道再興 村田大造先生のこと	2
R	2
ルポタージュ 素晴らしくない日曜日(ノット ビューテフル サンデー)	4
葛城峻	4
続・一括提出します 神谷量平	6
婦帆亭快報 No.1 野海	7
会報(?)	8
編集後記 R	8
キリスト教社会主義研究会々則	8

第88号 1992(平成4)年1月20日発行	
エンドレス・スタートレス 以士帖生	1
『神の国』の社会学(その十一)	2
武邦保	2
武邦保著「神の国」の社会学 京都・	

法政出版	—	4
拝啓 不破委員長様 諏訪千造	5	
会報	—	8
編集後記 R	8	
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第89号 1992(平成4)年2月20日発行		
長崎の海底電線 以士帖生	1	
『神の国』の社会学(その十二)		
武邦保	2	
雪やこんこ 市東真弓	4	
拝啓 不破委員長様(二) 諏訪千造	5	
会報(一) ムーブメントNo.29 目次紹介	—	7
会報(二)	—	8
編集後記 R	8	
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第90号 1992(平成4)年3月20日発行		
十字架 以士帖生	1	
号外 第90号を迎えて-整理整頓-	キ	
リスト教社会主義の周辺-	R	2
手紙 市東真弓	4	
拝啓 不破委員長様(三) 諏訪千造	5	
SCMの窓	—	7
会報	—	8
編集後記 R	8	
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第91号 1992(平成4)年4月20日発行		
神への旅 以士帖生	1	
「神の国」の社会学(十三) 武邦保	2	
SCMの窓 岡村信太郎氏逝去		
西川治郎	4	
建礼門院右京大夫 市東真弓	5	
思いのほかの 神谷量平	6	
会報	—	8
編集後記 R	8	
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第92号 1992(平成4)年5月20日発行		
俺は大工(でえく)だ! 以士帖生	1	
「神の国」の社会学(十四) 武邦保	2	
岡村兄の思い出 武田好一	4	
日朝友好展に際し日本人有志に告ぐ 神谷量平	5	
アンケート 二十五項目の公開質問 研究会事務局	6	
須磨の浦詠草(十二首) 灰地保夫	7	
会報(一)	—	7
会報(二)	—	8
編集後記 R	8	
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第93号 1992(平成4)年6月20日発行		
幼な児の「神の国」 以士帖生★	1	
「神の国」の社会学(十五) 武邦保	2	
SCMの窓・新刊紹介 キリスト教社会福祉の証言 日本基督教社会福祉学会刊	—	4
原稿募集 R	4	
実際は違っていたが、その日私の述べたかったこと(一) 神谷量平★	5	
弔辞 内田恒夫の英霊に 灰地保夫	6	
会報	—	8
編集後記 R	8	
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第94号 1992(平成4)年7月20日発行		
証言 以士帖生	1	
「神の国」の社会学(十六) 武邦保	2	
SCMの窓※1 R★	4	
実際は違っていたが、その日私の述べたかったこと(二) 神谷量平★	5	
ヒロシマと終末論(上) 灰地保夫	7	
編集後記 R	8	
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 J.H.コベルに関する記事

第95号※1 1992(平成4)年8月20日発行		
あれか、これか…… 以士帖生	1	
ひとり芝居 ヒロシマのモヒカン族(改稿) 神谷量平	2	
訂正※2 R	10	
キリスト教社会主義研究会々則	—	10

※1 「平和記念号」

※2 前号の訂正

第96号 1992(平成4)年9月20日発行		
よりどころ 以士帖生	1	
イエスのお言葉に於ける罪・罪人について(一) 中原賢次	2	
実際は違っていたが、その日私の述べたかったこと(三) 神谷量平★	4	
ヒロシマと終末論(下) 灰地保夫	6	
SCMの窓※1	—	7
92年SCM集い・研修会	—	8

※1 「一、ムーブメント第32・33号目次 二、中原先生の連載」

第97号 1992(平成4)年10月20日発行		
四つの弁証法 以士帖生	1	
イエスのお言葉に於ける罪・罪人について(二) 中原賢次	2	
象徴天皇制の源流 神谷量平	4	
号外 SCMパンフレットの復活について 事務局	5	
会報	—	7
編集後記 R	8	
相川高秋名誉教授時局講演会「廿世紀の苦悩と世紀末の夢」※1	—	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

※1 「主催 関東学院卒業生有志(高商・短大・大学) 世話人 神谷量平」

第98号 1992(平成4)年11月20日発行		
家郷の躰ざ記 以士帖生	1	
イエスのお言葉における罪・罪人について(三) 中原賢次	2	
近事変々 読人不知	4	
続・象徴天皇制の源流 神谷量平	5	
会報	—	8
・ムーブメント第34号・中原賢次著「イエスの『神の国の福音』」・SCM研究会'92研修会の集い・相川高秋名誉教授講演会・田辺秀穂著「ステイブンスンのいない島」・新入会員	—	8
キリスト教社会主義研究会々則	—	8

第99号 1993(平成5)年1月20日発行		
宴のあと 以士帖生	1	
イエスのお言葉における罪・罪人について(四) 中原賢次	2	
宗教と社会主義(上) -SCM神学への試み-	武邦保	5
短編 偽兵たち 新田好三	7	
編集後記 R	8	

第100号 1993(平成5)年2月20日発行		
「朝の風」で 以士帖生	1	
宗教と社会主義(下) -SCM神学への試み-	武邦保	2
告白と告発 佐藤岩子	3	
SCMの窓	—	4
休刊の辞 併せて'92年「東京の集い」に就て 神谷量平	5	
会報	—	8

坂田祐先生と大賀一郎先生

「ハス博士大賀一郎君の永眠」

大賀君は本年数え83になり、私は88になるから5つ年上であったが、東京帝大は大賀君が7年先輩であった。内村先生門下としても、大賀君は角筭時代からであるから大先輩であった。私とは50数年来親しい信仰の兄弟であった。彼は内村門下として先生から教わった純福音の信仰を最後まで持ち続け、少しでも動揺することがなかった。この点に於て私は、自然科学者としての彼に何時も敬服していた。

1924年の秋、私は米国ボルチモア市のジョンスホプキンス大学で研究に没頭している大賀君を訪問した。大賀君は歌子夫人と、市民の家の一室を借りて生活していた。夫人の手料理でおいしい夕食のご馳走になり、食後同大学の研究室に案内されて研究の現場を見学した。勿論ハスの発芽の研究である。大賀君は二千年以上地中に埋没されていたハスの実を発芽開花させたので、米国の学界に一つのセンセーションを起したのであった。この研究室で見せられたハスよりも、私が深く興味を感じたのは、北海道札幌農学校から出した英文の紀要であった。

大賀君はこの紀要を、同大学の図書館で見出し、その中に第二回生の学業成績の記事を発見したことを話し、そばに置いていたその紀要を私に示した。恩師内村先生は第二回生のトップにあり、各科目全部優等で群を抜き首席であった。次は大分離れて第二番宮部金吾博士、……あの有名な新渡戸稲造（当時太田）博士は第5番であった。あの記事を見て、かかる偉い先生を信仰の恩師として仰ぐことの幸いを歓喜したのであった。

歌子夫人は英語が不十分であるにもかかわらず、ダウンタウンに出かけて、家庭生活に関する色いろのことを学んでおられた。夫人は進取の気象に富み、常に研究につとめ、晩年に至るまで怠らなかった。夫人の母上は、東京三崎町のバプテスト教会の信者で、亡弟は関東学院の前身東京学院で学び、音痴である私の教え子で、音楽（器楽）の天才であった。

大賀君は外国遊学から帰り、満鉄を退いてからの生活は波乱に富めるものであった。晩年、関東学院大学に来て貰い、教授として自然科学を教えて貰った。府中から横浜の金沢八景にある大学に通い、少なくとも月一回は私の家で夕食を共にした。メイトはハス君の好物であったので、家内はいつもそれを用意していた。いきのよいのが魚屋から届いた時には、大賀先生がいらっしゃればいいのに……というのが常であった。



大賀君の貧乏生活をよく知っているの、話しがそこにゆくと、「神様はどうかして下さるよ」といって極めて楽観的であった。果して彼が信じている通りに、必要なものが与えられた。徹頭徹尾、信仰第一の生涯であった。

大賀君の言葉が不明瞭で、入院後はそれは一層甚しくなった。それに私の耳は非常に遠くなり補聴器も余り役に立たないので、病床での対談は非常に困難で、よく聞き取れなかったのは残念であった。併し死後に於ける人格の存続、並びに、なおより以上の発展については、彼も私も信じて疑わないのであるから、天上再会の希望を以って大賀兄を送るのである。

「これ主イエスをよみがへらせ給ひし者の我等をもイエスと共によみがへらせ、汝らと共に立たしめ給ふことを我ら知ればなり」（コリント第二・四14）

（1965年10月）

（坂田祐著『新編 恩寵の生涯』1976年、待晨堂発行より。原文は縦書）

【脚注】

「東京帝大」は「東京帝国大学」のこと。

「内村」は「内村鑑三」のこと。

「内村先生門下」坂田は1911年から弟子入りする。大賀は「角筭時代」の1902年から。

「角筭」は内村が開いていた聖書研究会の自宅住所地名。

「北海道札幌農学校」1876年に改称開校。「少年よ、大志を抱け」で有名なウィリアム・S・クラーク博士が初代教頭を務めた。「キリスト者の誓約」に署名している第一期生の中に、東京学院初代校長の渡瀬寅次郎（関東学院の第二の源流）、第二期生の中には内村鑑三や新渡戸稲造の署名がある。

坂田の三高時代には新渡戸稲造が校長であった。

「東京三崎町のバプテスト教会」1908年に設立した中央バプテスト教会のこと。現在の日本基督教団三崎町教会。

「コリント第二・四14」1917（大正6）年発行の『文語訳新約聖書』よりの引用。表記は多少異なるが、そのまま転載。

『新編 恩寵の生涯』（P.586）が発行される以前の1966年に『恩寵の生涯』（P.253）が発行されている。

（脚注&写真（2012年7月撮影）学院史資料室 瀬沼達也）

「大賀ハス」を追跡して

関東学院大学名誉教授 村山肇子

一九五二年七月十八日付の夕刊に「二千年前のハス、けさほころぶ」という見出しで、千葉市検見川町の泥炭層から発掘された、二千年前の種子から発芽させたハスが奇蹟的に開花したことを報じた記事が載った。

このハスは後に「二千年ハス」または、開花させた大賀一郎博士の名をとって「大賀ハス」と呼ばれるようになったが、このニュースは、アメリカの有名な雑誌「ライフ（現在は廃刊）」にも掲載され、またドイツのハンブルグで開催された国際園芸博覧会にも出品され、大きな反響を呼んだことは、当時中学一年生だった私も記憶している。

大賀博士は、一八八三年岡山県に生まれ、第一高等学校在学中にキリスト教無教会派の内村鑑三氏の主宰する「聖書研究会」に参加した。これが博士の人生を決定することとなったが、ここで後に東京大学総長となった故南原繁教授や関東学院大学創立者の故坂田祐院長と親しくなった。

一九三二年、勤務していた南満州鉄道（株）を退社して帰国した後、坂田祐氏の関東学院大学等で教鞭を執りながら「古代ハスの発芽研究」をはじめ「ハスの開花音」「蓮根や葉柄から採る糸」等々、ハスに関する種々の研究に専念し、優れた業績をあげた。大賀博士追悼文集『蓮ハ平和ノ象徴也』を読むと博士が植物学者として偉大であっただけではなく、一個の人間としてもそれを凌ぐ偉大な方であったことがわかる。

学院の卒業生で、元学院史資料主幹の三浦啓治さんは大賀博士の最後の講義を受けたという。三浦さんによると博士は講義の中で繰り返し、「人はどんな小さなことでもいいから、何かを続けることが大切である。積み重ねることにより、自分にとって何が天命であるか分かってくるし、それが後世に残るといふ結果になる。それが私にとっては、ハスの研究であり、私は五十歳になってこれが自分の天命だと分かったんです」と言われたそうである。

大賀先生の植えられた「大賀ハス」が学内に咲いているとの情報が有り見に行った処、葉に切れ込みの有るスイレンで「大賀ハス」は何処にも見当たらなかった。



学内に本物の「大賀ハス」があったことは、当時を知る何人かの人たちの話からどうやら確かなことらしい。しかしそれが何時どのようにして絶滅したのか、だれがハスの代わりにスイレンを植えたのかは、だれに聞いてもわからなかった。

▲大賀一郎博士顕彰記念板

2012年3月、学校法人関東学院は、大賀一郎博士を顕彰する記念板を関東学院大学オープンチャペルのレンガ壁に設置した。同時に関東学院六浦小学校は、校庭の丸池にご子息の大賀栄一・たえ子ご夫妻から寄贈の大賀ハスを移植し、その傍らに同じ内容の自立式記念板を設置した。(TS)

「大賀ハス」の花を再び、学内で見ることはできないものかと思って、大賀博士の息子さんの大賀栄一氏に相談にのっていただいたが、氏も種子しかお持ちでないとのことだった。

ところが偶然、非常勤講師として大学においでいただいている東京農工大の箱田直紀先生にこの話をしたところ、「府中市の大賀ハス管理会議のメンバーなので、大賀ハスの蓮根をもらってあげますよ。ただし移植時期のつごうで来年になりますが」と言ってくださった。

かくして、めでたく大賀博士ゆかりの関東学院大学に「大賀ハス」が再び、花開いたのです。

〔1996年、村山（丸山）肇子先生が工学部教授の時、同年8月発行の『月刊かながわ』に掲載された記事である。ただし、紙幅の都合により瀬沼が原稿量を約半分編集した。その原稿を村山先生にご校正いただいたものである。（文責・瀬沼達也）〕



関東学院 校訓

編集後記

◆今回は関東学院の建学の精神と校訓「人にたれ 奉仕せよ」に基づく人間・奉仕教育をテーマに編集した。2011年3月11日の東日本大震災を契機にボランティア活動が脚光を浴びてきた。この約2年間、本学院の教職員、学生・生徒・児童・園児は、自分ができる範囲・方法で奉仕活動を行った。ボランティアとして被災地に入る、被災地の人々と直接・間接に交流する、義援金を寄付するなど様々であるが、実際に行動してきた。約120年前に、関東学院の建学者である A. A. ベンネット博士も同様の奉仕活動を日本在住の外国人を代表して率先して行った。博士の墓碑には「He Live to Serve」と刻まれている。横浜バプテスト神学校、東京学院そして関東学院の過去と現在を結びつもの、それはキリストに基づく建学の精神である。その脈々と続く精神に基づく教育活動を記録することこそ、学院の重要な歴史を刻むことになるのではないかと思う。◇ご執筆ご校閲いただいた、神谷量平氏、高野進先生、村上肇子先生、三浦啓治氏、小山信弥氏にこの場を借りて感謝申し上げます。（瀬沼）◆神谷量平様から学院史資料室へ「キリスト教社会主義研究会会報」、『山麓通信』が寄贈されました。これを機に「学院史資料」の一つとして広く知られ、記録に残るように、との思いで、今号への掲載が叶いました。寄稿くださいました神谷様、三浦様に御礼申し上げます。◇今号では新たな試みとして資料集を本誌別冊として発行しました。将来の学院史編纂の一助となるよう今後も継続できればと思っています。（菊池）

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第16号 発行日 2013(平成25)年1月31日

発行人 関東学院 学院長 森島牧人

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932